1973年7月1日発行
共産主義者同盟（RG）
第11号　100円　発行人　野村　忠

赤報

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く揚げ、国際非合法党を建設せよ！

革命戦争派の組織問題（下1）

═烽火一派の組織に関する根本思想の批判═

《目　次》

序文（上）（中）8～9号掲載
第一章　共産主義と民主主義
第二章　烽火一派の組織に関する根本思想（I）
第三章　烽火一派の組織に関する根本思想（II）
(a)　スターリンの組織観批判
(b)　RGの清算
（下I）―本号掲載
（下II）―次号掲載予定
第四章　政治局＝軍事委員会　RG＝政治軍隊を職業革命家とする党建設の革命的意義について
(イ)　第一次RGの建設I
(ロ)　第一次RGの建設II
(ハ)　「RG＝世界赤軍」論の清算の意味するもの
(ニ)　第一次RGは単なる戦士、戦闘団であったのか？
(ホ)　「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」
(ヘ)　「岡田論文」と「共産主義的団結」
(ト)　「田原論文」と「共産主義論争」
(チ)　「共産主義」と「赤報論争」

第三章　烽火一派の組織に関する根本思想（II）

(a)　スターリンの組織観批判

（9号掲載済）

(b)　RGの清算

「烽火」二八三号（七三年二月二〇日）に一年ぶりにRG問題をあつかった論文が掲載された。

論文の表題は「RGの戦果食いつぶす赤報派尻目に非合法党建設の中で、血肉化せよ」となっており、その序文で次の様に述べている。

「その為にも、RG闘争の意義を確認すると同時に、一連のRGの闘いを継承し、総括し、党建設の内に血肉化する闘いを推し進め赤報派が「RG」を名乗り、RGの遺産食いつぶしに専念している」（烽火二八三号）

従って、われわれがこの論文の序文を読んで、烽火一派が彼等なりに「赤報派」の批判や、RGの総括を行なおうとしているのかと考えたとしても、決して不当ではなかったはずである。

だが、残念なことに、この論文には第一に「赤報派」がどの様にRGの遺産を食いつぶしているかについて、全く一行も述べられていない。表題の毒々しさにもかかわらず。

正面から論戦をいどもうとするときには、背すじをまっすぐにして、自分の命題を公然と証明してほしいものだ。

第二に、「RGの闘いを真に総括し、継承しているのは我が同盟（注、烽火一派）である事を鮮明にしているわけでもない。

より正確に言えば、この論文は一年前に書かれた烽火一派の政治局論文「戦士＝組織者たる革命家の集団へ同盟を打ち鍛えよ」（烽火二六八・九合併号、七二年、二月一日、二月十五日）の根本思想を焼き直して、所々におずおずと採用したものである。

第三に、この論文は「我々はこうした地平に立った今こそ、更にかつてRGが貫徹した武装闘争を断固として防衛しなければならず、その一環としての更なる裁判闘争の拡大、展開をかちとっていかなければならない」と述べているが、彼ら烽火一派にとって、武装闘争は「かって」の話であって、今の任務は「裁判闘争の拡大展開」になってしまっており、第一次RGの教訓は、今や裁判闘争の中にのみ「継承」されているということがわかる。

しかも、この裁判闘争を闘っている第一次RGのメンバーには、離れ一人烽火一派に所属していない者がいない（烽火一派によれば、第一次RGからの降格者が一人いるというわけであろうが）という事実を彼らは隠蔽しているのである。

結局のところ、「烽火」二八三号のこの論文は、烽火一派が「RGの戦果を食いつぶ」し、清算してしまったため、もはや、民主主義者としてしか、対応するすべをなくしてしまったあれない「RG救対」メンバーが、疲れ果てて書いた駄弱にすぎず、従って、「赤報派」に対して、全く一行の批判も加える事が出来なかったことはともかく、当然なのであろう。

七一年、秋、烽火一派の革命戦争と軍事組織からの脱走以降、一年半にわたって、われわれが赤報一、二、五、六、七、八、九、十号と連続して、系統的に烽火一派の綱領、戦術、組織上の主張に対して正面から批判しているにもかかわらず、唯の一回の反論も組織出来なかった（もちろん、時々、二行の陰口は出見聞けしたが）烽火一派の政治局は、このつかれはてた「救対」メンバーの底痛集局に、思い切り「党派性」のある毒々しい見出しと、序文を付けさせたことが、この論文全体の奇妙な、ちぐはぐな印象を読者に与えている真相なのである。

前節までにすでにわれわれが明らかにした様に、烽火一派は、RG建設と武装闘争＝革命戦争を今や放棄し、清算してしまっているのであるが、さりとて、その事を卒直に公言する勇気を持たず、RG裁判支援闘争を宣伝する事によって、あたかも自分達が、第一次第二次RGの真の継承者であり、過去には自分達も大層な苦しみをなめて来たわけであって、「赤報派」から攻撃されている様な「清算派」とはちがうのだという事を暗に示しておきたかったのだろう。

烽火一派がRGからの脱走兵であること、12・18ブントにおける71年秋の分派闘争の本質が何であったかということについては、我々がすでに何度も述べてきたとおりであり、我々の見解は今や先進的労働者大衆の間で広汎に受け入られている。

だが、烽火一派が、RG裁判の記事を烽火紙上で度々掲載している関係上、ひょっとして、第一次RGを指導したのは、現在の烽火一派のメンバーではなかったのだろうかと、事情を知らない読者が持つかもしれない疑問に対して、我々は、答えておきたい。

第一次RGの建設及びその総括は、我々の直接の出発点であり、十二・一八路線は何よりも、第一次RGの恒常的武装闘争の総括の中から勝ちとられた。

そして、七一年秋の分派闘争、烽火一派、旧神奈川左派の脱走に対して、我々は、十二・一八路線の継承発展を旗印として闘い抜いた。

にもかかわらず、我々は、第一次RGの総括に関して、我々の態度をまとまった形で公表して来なかった。

そして、我々が、討論を、我々の内部にとどめ、公表しないで来た以上、誰れも、第一次RGを総括出来るはずもなかった。我々は現在の段階で、烽火一派の反動的な第一次RG総括に対して、反論しつつ、若干の総括を、歴史的事実の公表と合めて行っておきたいと思うのである。

更に、又、「RGの戦果食いつぶす赤報派尻目に……」（烽火二八三号）の根本思想を掲載した「戦士＝組織者たる革命家の集団へ同盟を打ち鍛えよ」（烽火二六八・九合併号）という烽火一派の政治局論文は、どの様に、軍事組織建設がたくみに清算されるかという見本を読者に示していることでもあり、それを暴露することは、革命戦争派の中に清算主義が横行している現在、時宜にかなったものと我々は考えるのである。

(イ)　第一次RGの建設（I）

まず、第一次RG建設時の事情から述べていく。

「戦士＝組織者たる革命家の集団へ同盟を打ち鍛えよ」（烽火二六八・九合併号）は次の様に述べている。

「六九年・四・二六の敗北をきっかけとして、同盟内にこの敗北を克服するための党内闘争→党内闘争が開始され、この論争を喚起した赤軍派の七・六における組織無政府主義的行動によって党内闘争は一挙に党派闘争に転化した」

「Q．党の軍隊の創出か、軍建設かといった論争に入り、われわれは、関西地方委員会独自に軍（RG）建設に着手した」。（同）

前述の赤軍派との分派闘争に関しては七・六事件を中心として、すでに本論文の（中）赤報九号、「二回大会議約と三・六規律」のところで、我々の見解をくわしく述べている。ここでは、くり返さない。

だが、後半の内、「われわれは関西地方委員会独自に軍（RG）建設に着手した」というのは、事実を伝えていない。これについては七・六事件を中心として、すでに本論文の（中）赤報九号、「二回大会議約と三・六規律」のところで、我々の見解をくわしく述べている。ここでは、くり返さない。

だが、後半の内、「われわれは関西地方委員会独自に軍（RG）建設に着手した」というのは、事実を伝えていない。これについてはもっと詳しく見ていくが、すでに、東京駐屯地の労働者出身の部隊（この部隊はB派の影響を最も強く受けていた）。二隊は東京駐屯地の労働者出身の部隊（この部隊は、南部地区委員会の影響が最も強かった）。三隊は、関西駐屯の労学出身の混成部隊（この部隊は、在阪中央委員グループの影響が最大であった）。この三隊で、RGの隊員数は、一連の党内闘争に参加しており、九回大会にも出席しているのだから、これらの事実を知らないはずはない。にもかかわらず、この党内闘争や九回大会、そして、東京駐屯地の二つの部隊について述べないのは、七一年秋の脱走以降、彼らの思想が、地方主義に毒されてしまった結果、彼等の脳裏からは、関西駐屯隊以外の部隊は消し飛んでしまったのであり、又、彼らのサークル主義の根性は、激しい党内闘争を、分派闘争の勝利によってRG建設がなされた様実を思い出したくないのであろう。

烽火一派の意図は、自分達が関西出身である事をいいことに、又、脱走後東京から関西に逃げ帰った自分のはずかしさをおおいかくす為に、RG建設の歴史的事実を歪曲し、あたかも「関西地方委員会」が「独自」に建設したかの如く見せかけ、更に、事実を知らない人達に対し、あたかも、当時、烽火一派の政治局員が中心になって、党建設をおこなったかの様に錯覚させようとしているのである。

事実は、現在の烽火一派の政治局員中誰れ一人として、第一次RG指導を直接担った者はいない。

彼らは、当時の地区委員、地方委員の眼から観て二次RGを総括し、反動的評論を行なっているにすぎないのである。

その「関西地方委員会独自」の一「軍」を指導したかの様に言いふらし、自分達の政治的権威を維持するために歴史の偽造を行っているのである。

(ロ)　第一次RGの建設（II）

「党内闘争の過程でそれまでの街頭武装闘争の一線をになった学生活動家の大半を失ったわれわれの軍建設は、地区の労働者の中から党直轄の軍隊（RG）を創出する事から始められた。」

「また、地党にとっては、RGの隊員を戦出する過程は、地区党及びその全同盟員が党指導部との関係をその組織的関係において軍事的な質においても、予定されるRGと同質のものに変革する過程であった。「政治過程論的党組織―手段としての党―の止揚」とはまさしくこの様な条件と赤軍派の無政府主義的党内闘争に対する批判から生み出されたものであった」（同、烽火二六八・九号）

当時（一九六九年九月）の関西における部隊の建設が述べられているのであるが、ここでも事実は一面的にしかとらえられていない。

部隊の建設の過程で、われわれは（在阪中央委員グループ）に、赤軍派との分派闘争の意義を強調することが重要であったと同時にとりわけ、地区党の労働者党員のRGへの組織の為には、「北摂、西地区プラクション」の傾向との党内闘争が不可欠であったことを隠蔽してはならない。

「北摂、西地区プラクション」とりわけ、北摂地区委員会は、党内闘争の初期（六九年六月）にすでに意見書（同盟の当面する任務＝いかにして党を建設するか）を提出している。

この意見書は次の様に述べている。

「一般的に軍団建設に賛成かも反対か、とか、秋の臨時革命政府宣言に与するかしないか、とかだけ論するのでは、くて、「党内闘争」を直接担った者は、当時の地区委員、地方委員の眼から観て二次RGを総括し反動的評論を行なっているにすぎないのである。

これのみが、唯一、正しい解決の道を拓くものとわれわれは確信する」（同意見書P3）という様に、党内闘争に対する正しい組織的態度を出発点にしながら、思想的には藤本進治の「革命の哲学」政治的には、各地区マッセントから武装蜂起、組織的には、党中央直轄軍団反対、地区プロレタリア直殺軍団を主張した。

これらの主張は地区党における当時の階級的労働運動と北摂地区党における「地区軍団」の建設を実践的背景にしたものであった。

だが、実際には、わが党が、全国的な政治情勢に対処するために、革命戦争の開始を準備するための党の改組（党中央直轄軍団の建設を中心とする）が不可欠であったのである。

北摂プラクションは、党内闘争に対して、正しい組織的出発点に立たながら、地区党の立場にとどまり、地区主義、地方主義といった組織上の分権主義を克服する事が出来ず、その点から、「党中央直轄の軍団」（RG）を地区軍団と対立したものとおける、思想的には、藤本進治の「革命の哲学」の破綻を見ることができず、その結果、地方における武装蜂起を党の目的にしてしまい。そこから、概要、次の様な党の改組の提案をするに至り、そのプラクションの破綻は明確になったのである。

「党内闘争の過程でそれまでの簡単に反動の危機に突入してしまったわが同盟の組織的欠陥はどこにあったのか、この危機をどの様に克服し、更に強固な党を建設するのか、全生命をかけて討議しなければならない。

これのみが、唯一、正しい解決の道を拓くものとわれわれは確信する」（同意見書P3）という様に、党内闘争に対する正しい組織的態度を出発点にしながら、思想的には藤本進治の「革命の哲学」政治的には、各地区マッセントから武装蜂起、組織的には、党中央直轄軍団反対、地区プロレタリア直殺軍団を主張した。

これらの主張は地区党における当時の階級的労働運動と北摂地区党における「地区軍団」の建設を実践的背景にしたものであった。

だが、実際には、わが党が、全国的な政治情勢に対処するために、革命戦争の開始を準備するための党の改組（党中央直轄軍団の建設を中心とする）が不可欠であったのである。

北摂プラクションは、党内闘争に対して、正しい組織的出発点に立たながら、地区党の立場にとどまり、地区主義、地方主義といった組織上の分権主義を克服する事が出来ず、その点から、「党中央直轄の軍団」（RG）を地区軍団と対立したものとおける、思想的には、藤本進治の「革命の哲学」の破綻を見ることができず、その結果、地方における武装蜂起を党の目的にしてしまい。そこから、概要、次の様な党の改組の提案をするに至り、そのプラクションの破綻は明確になったのである。

（イ）党中央は、少数によって完全非合法制に入り、全国情勢の正確な把握と分析に立って理論活動を行う。（ロ）党機能を十分に果たしうる為の最大の環は地区党の全国化と各地区の強化を計る事。その組織は極少数の秘密の中枢機能を集中し、同盟全体の任務分担、分業を確立すること。」

「（ニ）地区党の任務は……現段階的には、戦略部隊の形成と戦略拠点を設定しての攻撃的闘争を展開し、最終的には地区ソヴェート権力樹立へ向けての蜂起を準備すること」（北摂地区委意見書）

このフラクションは、組織上では、レーニンの「なにをなすべきか」や「一同志に与える手紙」にその根本思想を求めようとした。だが、それは、結局のところ、スターリン経営細胞論に立脚した「地区党」（レーニンのボリシェヴィキ党には地区党＝地区委員会はない）の立場からレーニン主義を歪めることを意味したのである。この主張は従来の大衆的実力闘争を指導してきた党を、武装蜂起を組織する党へ転換するという点では前進であったにもかかわらず、他方で、地区党の眼から全党の改組を構想するという地区主義の理論的根拠にレーニンの文献を利用したり結果、地区党に党の実践的指導の全権を要求するという誤りに陥り、その結果、党中央の役割を全党の実践的指導と切り離した思想的指導に一面化することによって、当時要求されていた党中央直轄の建設を軸としたフラクションの組織的指導に対する自らの無能、その政治姿勢の破産を証明したのである。

地区軍団は党中央直轄の正規軍と結合してのみ正しく位置すべきであり、党中央直轄の正規軍建設の主張が、田原派ブロレタリア独裁の主張と結合することによって、当時要求されていた党中央直轄の建設を軸としたフラクションの組織的指導に一面化することによって、党中央直轄の正規軍建設の主張が、田原派プロレタリア独裁と結合することによって、党中央直轄の正規軍建設を主張する点で、当時の在阪中央委グループと赤軍派フラクションは同盟して、北摂、西フラクションと闘争したといってもいいが、だが

隊である限り「戦闘」をほとんど唯一の活動とする革命隊」などは存在しない。又実際存在えない事は自明の事だ。

烽火一派の言う軍隊はブルジョア軍隊以下的な代物なのである。

党の分裂はある歴史的条件の下では不可避なのであるから、彼の様に問題をたてるなら革命組織建設は不可能であるという結論に達するか、又は党の分裂に左右されない(今)軍事組織の建設(これはいわば私兵とでも言うべき組織でしかないが、彼らの非公然軍事諸機関とはいわばそういうものであろう。)という実践的結論に達するしか他はない。そして、現実には両者は度々相互補完関係になる。

実際、彼らは脱走したRGを一万で、合法党の別名である戦士=組織者に事実上解体し、他方では非公然軍事諸機関に解体してしまっている。

第一次RGにとっては「党の分裂」が致命的であったわけでもなく、又、党派闘争に対して著しく無力であったわけでもない。

第一次RGの時期における「党の分裂」とは、具体的には、七〇年春の情況、叛旗派との分裂及び七〇年夏から冬にかけての日向派の分裂を指すわけであるが、これらの分裂が、第一次RGにとってはたして「致命的」であったただろうか？迂に情況、叛旗派といった党内軍事反対派との党内、分派闘争の中で、RGは、思想的、政治的、軍事的にも鍛練され、組織的独立をはかることができたのである。

また、RG脱走グループである日向派との党内=分派闘争は、共産主義、革命戦争、RG建設をめぐって行なわれ、日向派が革マル派の思想を密輸入し、共産主義を神学にまつりあげ、革命戦争、RG建設に反対したのに対して、われわれの党フラクションは、これと闘い、共産主義=革命的実践、革命戦争、RG建設、革命的マルクス主義の復権という点から、RGの数回にわたる戦闘とRG内部で闘われていた「岡田論文」提起以降の論争と「赤報論争」(七〇年八～十月)を総括し、その指導を通じて、フラクションの指導理論であった田原理論の持っていた思想的欠陥(「階級概念」の曖昧さ、プロレタリア独裁=社会主義、RGの組織的位置に対する曖昧さ)を克服して12・18路線を確立したのである。

日向派との「分裂」が第一次RGに対して「致命的」であったことはなく、むしろ「赤報論争」が日向派との分派闘争、12・18路線の確立に対するわれわれのフラクションの「原動力」になったのである。

更に、烽火一派のもう一つの命題である「同時に党の基本組織から切り離された戦士の集団が党派闘争に対して著しく無力である」という点について述べておくと、この様な命題は一般的には成立しない。

例えば、70年2月における赤軍派との党派闘争において、第一次RGが「著しく無力」であったというのは事実ではない。当時、RGは党派闘争の中核部隊であり、赤軍派、中央軍との闘争において彼らを除いては、われわれは一切の計画をたてることはできなかった。

二・一四の闘争とそれに続く赤軍派中央軍との党派闘争の勝利及び関西におけるUG、A・I・Fの建設に果したRGの役割は大きく、決定的と言ってもよかった。

赤軍派に対する軍事的勝利によって、われわれは、「ブントの壊滅」という赤軍派の当初の政治目的を粉砕して、一定の政治的勝利を強奪した。問題は主要に次の点にあった。

すなわち、この闘争におけるもう二つの政治目的であった党内右派、情況、叛旗派)をたたきつつ党内左派のヘゲモニーをとるという計画を充分に実現できなかったことである。

この様な事態は、二・一四における戦術問題、強制収容闘争問題もからんで、RGの組織的性格をめぐる論争を引き起こしたのである。

すなわちその一つは、「軍の独立機能」の強調、「軍の党からの相対的独立」の強調であり他の一つは、「やとわれ兵」意識として「党の軍」の一面的強調であった。

これらRG内部の二つの見解は

況叛旗派、BL派、仏派との党内闘争を組織しようとしていたのであるが、このヘゲモニー論的な党内闘争の方法によっては、党内闘争を充分に組織することはできなかったのである。

以上、思想的には、共産主義、組織的には、政治局と軍事委員会中央集権的指導、政治的には、武装闘争と党内闘争の二つの問題を中心に、組織的には、RGの解体と全国的党建設の基本的課題を提起した上で、RGの個々の隊員に対しても同様の政治的決断を迫った事にあった。

三月三三日、秘密技術上の限界さが原因となって政治警察による弾圧を許し、RGの一角を崩されたが、それを契機により一層徹底した地下活動に入り、RGは赤軍派との党武装闘争、愛知展開から教訓を学び、党内闘争に対する理論的準備の為に、関西派の指導理論であった原理論を研究し、組織的準備の為に関西を離れて、首都での党建設に向った。

情況、叛旗派、日向派に対する党内・分派闘争に打ち勝つことなくして「軍事を組織する党」、「共産主義の党」建設、RG確設を進める事は出来なかった。

なぜなら、情況、叛旗派は一貫した反RG派、軍事反対派であり、更に日向派は七〇年４・28闘争まで「買して機関から脱落してフラク固めを行っていたが、RG脱走は、ある意味でそれと極めて似かよったものであった。

すでに述べた六九年九・二一闘争でのRG＝将校団論、十・二闘争での共産主義突撃隊、十二月でのオルグ団論等は、すべて党中央直轄下規軍がプルジョア国家権力との武装闘争や軍事組織の建設においてはたした役割のそれぞれの一側面を強調する事であったとはいえそれらが一面である事を把えた限りで、われわれは正規軍任務と組織性格について、より豊富内容規定を与えることが出来た。

とはいえ、七〇年二月赤軍派との党武装闘争、四月日向派との党内闘争をはらんだ地区軍団建設と「破壊戦」、ML派との党武装闘争、情況、叛旗派との党内・分派闘争日向派との党内・分派闘争といった一連の闘争において真の革命党の思想的、政治的、組織的基軸をつくり、党を革命していく為には強固な分派が不可欠であり、RGは、正規軍としての役割のみならず、いわばどの「（分派闘西派）」の軍隊として12・18まで党内・分派闘争を闘うことになるのである。

われわれは、六九年一七〇年に至るRGのはたした任務と党における位置、その組織性格を考慮して、その総称を政治軍隊と呼び、プロレタリア独裁権力におけるRGの位置を歴史的にアナロジーして当時、RG＝チェカ論と名づけたのである。

七〇年七月、中央軍事委員、RG多数の政治警察による逮捕及び8中委における「関西派」の日向派に対する「内的ではあったが政治的敗北（田原秀氏の権利停止処分）は、われわれのフラクション（関西派）が、すでに開始されつつあったRG内「赤報論争」に対する解答を準備しつつ、同時に、田原理論の弱点を克服して、フラクションの思想的、政治的基盤を確定し改報する事によってはじめて勝利に変える事が出来るものであった。（イ）「党とRGの内容をめぐる論争」、とりわけ、党の役割、目的、任務、性格と位置について、（ロ）「規約をめぐる論争」「党生活、RG生活、党紀、軍紀」について。（ハ）「世界革命の展望、就中、先進帝国主義国足下に於ける。恒常的軍事組織＝RGの存在可否の問題」について（RG内機関紙「赤報」№２、七〇年九月）の論争が開始された。

まず「先進帝国主義足下における恒常的軍事組織＝RGの存在可否の問題」について述べておくと、今日、その理論的基盤は、党内闘争、党内闘争、党武装闘争、共産主義革命のために、革命戦争によってプロレタリア独裁を闘いとるために「権力闘争、党内闘争、党内闘争」（「党内闘争とたたかわれわれの任務」Ｐ４）をその任務としたのである。

以上、われわれは、第一次RGの組織性格に関する党内論争、党内闘争・分派闘争の歴史的考察を行うことによって、十二・一八路線確立に至る第一次RGの組織上の若干の総括を行った。

ここまでの論述における我々の意図は、蜂火一派の「第一次RGの敗北と教訓」なるものの事実の歪曲とねつ造に対する暴露であり組織問題に関する清算主義的「総括」に対する反論であり、その限りで我々の総括を公表したのである。

さて、次の課題は、蜂火一派の第一次RG建設に関する思想上の「総括」＝第一次RGの思想は、「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」だからRGは、思想的に破産したのだとする見解に対して事実経過を明らかにし、第一次RG建設に関する思想上の総括を政治問題、組織問題との関連で明らかにする事にある。

(ホ)「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」

「蜂火」一派は、更に「総括」し、全く説明にもなっていない。

彼らは「母胎論的イデオロギー」が「必然」だと？何のことかわからない。

「蜂火」一派は、更に「総括」だと？何のことかわからないが、もうすこし、「真に迫った描写」が引用する事になる。

「党の基本構造から切りはなされた隊員達は、地区からのビラ一枚ない生活を強制され、次の戦闘に至るまでの待期生活を強制されるのである。それは、日常的に刹那的感覚や、その防衛としての隊内共産主義、母胎論的イデオロギーを形成していくのである。

しかし、党全体の軍事的系列化とその政治的基盤が明確にされない中では、脱走兵の続出は当然の帰結であった。

脱走兵達は、家族や恋人達の下へ走り、そこにおいて政治警察の手におちていくのである」（火二三三号RG被告アピール）

このアピールの筆者が第一次RGからの除名者であるということは我々が説明しないでもアピールの内容そのものによって充分に証明されている。そして、これはまさに「蜂火」一派の「真情」の吐露なのである。

このアピールの筆者が問題にしているのは、おそらく、六九年十二月から七〇年四月までの事であろうが、第一に「党の基本構造から切り離されたこと」と放言するとき、「基本構造」（ウ）というのは中央委員会、地方委員会、地区委員会、細胞のことを指しているのであろうが、RGは「党の基本構造から切り離されたこと」のではない。再度言っておくが、われわれは積極的に「切り離」したのである。

地区党所属のメンバーを、それらから「切り離」し、中央政治局の「軍事委員会直轄正規軍所属」「革命」にしたのであり、それはRGへの参加を「決断」した個々人によって革命戦士として、党に対して義務を果たさなければならないことを意味したのである。

まさに、この「切り離」す事の思想的、政治的意義をめぐって党内闘争をわれわれは闘ったのではなかったのか。「担」「切り離」した上で、RG政治局闘、地区軍団建設、UG建設、地区農民闘、軍の中の党の建設として新しい結合を追求したことを彼は忘れ去っている。

このアピールの筆者が「切り離」された」ときわめて被害者的立場事で「組織破防法と闘う集会」に参加した人達に訴えるとき、彼は、「党の基本構造から切りはなされた隊員達に対して、軍事組織を作ったことは誤りだったといっている事を意味する事を知らねばならない。党中央直轄の正規軍を建設することから軍事組織の建設を実現する路線が唯一の正しい道であったことは、第一次RGの建設の過程における先に述べた党内闘争分派、闘争の内実によって証明されているのである。

第二に、彼はつづけて言う。「隊員達は、地区からのビラ一枚ない生活を強制され、次の戦闘に至るまでの待期生活を強制されるのである。」（同）

蜂火一派の立場に立って、過去をふり返れば、こんな風に地獄絵がえがかれる。外は自由な天国で軍隊の中は地獄であり、牢獄である。党は闇魔大王で、隊長は鬼官吏や、その防止策としての隊内共産主義、母胎論的イデオロギーを形成していくのである」（同）

彼は、「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」が「刹那的感覚」の防止策として「形成」されたと言う。

当時の恐実を知っている人達にとっては手のつけられない笑うべきこのアピールの筆者の相も変わらずの小ブルジョア的泣き事ぶりにふれて、我々は思わず彼の顔を想い浮べて全く馬鹿らしくなってまってしまうわけにはいかない。なぜなら彼のこの様な態度が、実際第一次RGの思想的総括に関する蜂火一派の核心をなしているからである。

「刹那的感覚」の「防止策」として「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」を「形成」してしまった第一次RGは、従って思想的にも敗北したとのみ彼らは「総括」するわけである。だがこの様な「総括」によっては、12・18路線の思想上の核心である「共産主義＝革命的実践」、マルクスの「資本主義批判」「反権の革命的意義を理解する事が出来ない。

なぜなら、「共産主義＝革命的実践」「資本主義批判」の復権を「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」が「刹那的感覚」という概念で描いている。

蜂火一派にとってすでに「伝説」化されているこの様な主張が全くの偽りにすぎないことは、すでに前期において詳しく述べたのであるから繰り返さないが、蜂火一派の立場に立ってしまうと、地区軍団建設（九一十月）、地区農開（十一十二月）、UG建設（七〇年一二三月）、全国政治展開（一一一月）、岡田論文をめぐる論争（十一一月）、原理論をめぐる論争（三一四月）そして更に隊の組織性格を大きく規定して思想上の党脆を克服したことによって、今日、蜂火一派は「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」は、誤りであるとすることによって、あたかも彼等自身はこの「ハンカ」に対して無関係であったかのように言うだが、その様な態度は、実は武装闘争・軍事組織の建設から何も学んでいなかったということを自ら告白しているにすぎない。

なぜなら、「隊内共産主義、母胎論イデオロギー」は反スタマルクス主義に思想的に立脚した六〇年代の新左翼が、武装闘争と軍事組織の建設を進めた場合、不可避的に経験しなければならなかった「成長の病」であったからである。

われわれは、この「病原菌」をRGのみならず、関西派フラクション、更に全党に植えつけようとしたのであり、この中でわれわれ自身の中に「抗体物質」を蓄積し「病」を治して、次の「成長」（12・18路線）をとげたのである。

実際、この「病」は、「成長の病」なのであるから、一定の「成長」（軍事組織の建設と武装闘争の開始）をとげない間は、決して発病しないのである。

今日、蜂火一派が、この「病」とあまり関係がなかったかの様な態度をとったり、又、少くとも自分達には責任がないという態度をとったりしているのは、彼らの指導的メンバーが、当時、RGや中央軍事委員会に所属していなかったということに尽きる。

彼らが、「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」を悪魔が来た様に恐れ、いみきらうのは、それが、武装闘争、軍事組織建設と結びついている事を直感的に知っているからである。

次の節からわれわれは「隊内共産主義、母胎論イデオロギー」について歴史的に考察していく。

この作業を行う政治目的は、第一に、われわれと蜂火一派との対立点を一層鮮明にすることであり第二に、かつての第一次RGメンバーの内、闘いつき倒れ、今は立ち上っている人が、今だ、われわれと連絡をとっていず、一人「総括」作業を行っている諸君に対するわれわれの「援助」であり、第三に、清算主義的総括を行っている赤軍派内諸派に対するわれわれの批判でもあり、第四に、共産主義革命の不可避性を確信し、革命戦争に立ちとろうとしている先進的労働者人民に対するわれわれの提助である。

(ヘ)「岡田論文」と「共産主義的団結」

「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」が、党内ではじめて問題になったのは、六九年十二月である。

六九年十・二一中央権力闘争＝マッセンスト、十一・六首都ゲリラ戦に、RG、地区軍団、AIFの総力を投入して闘ったわれわれは、その敗北の総括をめぐって反対派に転換しつつあった叛旗派終結軍事局反対派の立場に立った情況派（すなわち、党派軍団反対と「党内闘争を組織しつつ」との党内闘争を組織しつつ恒常的武装闘争と党の革命のためにわたり、それは思想的には、その組織観を支えている「さらなる組織的性格のものの批判に向わねばならない性格のものであった。

岡西駐屯部隊（関西派系）に対する「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」が、党内ではじめて問題になったのは、六九年十二月である。

この問題に対して、当時のわれわれ「関西派」は、綱領的には田原プロレタリア独裁論を基本的に継承し、戦術的には革命戦争、組織的には「共産主義を組織する党」「軍事を組織する党」「軍閥的軍事組織の建設」「RG建設」を主張して党内闘争を組織し、戦術、組織との関係でRGの組織的性格が「関西派」内部で再度問題になった。

その二つ、RG＝チェカ論について述べておく。チェカは、一九一八年社会革命員によるレーニン暗殺未遂事件との関係で共産党中央直轄党員の軍隊として建設されたものであり、その実際上の役割はプロレタリア独裁権力に反対する社会革命党、メンシェヴィキ等との党武闘争、共産党首脳の防衛スパイとの闘争、クロンシュタット反乱の鎮圧、内戦と帝国主義の干渉戦での最も困難な任務の遂行といった点にあった。

このチェカを問題にしたのは田原世界プロレタリア独裁論、一党独裁論を理論的基礎として、われわれが樹立すべき権力であるプロレタリア独裁における RGの位置とその任務を規定する場合、RGとその任務を規定するチェカとをめぐる論争、とりわけ、党の役割、目的、任務、性格と位置について、（ロ）「規約をめぐる論争」「党生活、RG生活、党紀、軍紀」について。（ハ）「世界革命の展望、就中、先進帝国主義国足下に於ける。恒常的軍事組織＝RGの存在可否の問題」について（RG内機関紙「赤報」№２、七〇年九月）の論争が開始された。

まず「先進帝国主義足下における恒常的軍事組織＝RGの存在可否の問題」について述べておくと、今日、その理論的基盤は、党内闘争、党内闘争、党武闘争、共産主義革命のために、革命戦争によってプロレタリア独裁を闘いとるために「権力闘争、党内闘争、党内闘争」（「党内闘争とたたかわれわれの任務」Ｐ４）をその任務としたのである。

以上、われわれは、第一次RGの組織性格に関する党内論争、党内闘争・分派闘争の歴史的考察を行うことによって、十二・一八路線確立に至る第一次RGの組織上の若干の総括を行った。

ここまでの論述における我々の意図は、蜂火一派の「第一次RGの敗北と教訓」なるものの事実の歪曲とねつ造に対する暴露であり組織問題に関する清算主義的「総括」に対する反論であり、その限りで我々の総括を公表したのである。

さて、次の課題は、蜂火一派の第一次RG建設に関する思想上の「総括」＝第一次RGの思想は、「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」だからRGは、思想的に破産したのだとする見解に対して事実経過を明らかにし、第一次RG建設に関する思想上の総括を政治問題、組織問題との関連で明らかにする事にある。

(ホ)「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」

「蜂火」一派は、更に「総括」し、全く説明にもなっていない。

彼らは「母胎論的イデオロギー」が「必然」だと？何のことかわからない。

「蜂火」一派は、更に「総括」だと？何のことかわからないが、もうすこし、「真に迫った描写」が引用する事になる。

「党の基本構造から切りはなされた隊員達は、地区からのビラ一枚ない生活を強制され、次の戦闘に至るまでの待期生活を強制されている中で、刹那的感覚や、その防衛としての隊内共産主義、母胎論的イデオロギーを形成していくのである。

しかし、党全体の軍事的系列化とその政治的基盤が明確にされない中では、脱走兵の続出は当然の帰結であった。

脱走兵達は、家族や恋人達の下へ走り、そこにおいて政治警察の手におちていくのである」（火二三三号RG被告アピール）

このアピールの筆者が第一次RGからの除名者であるということは我々が説明しないでもアピールの内容そのものによって充分に証明されている。そして、これはまさに「蜂火」一派の「真情」の吐露なのである。

このアピールの筆者が問題にしているのは、おそらく、六九年十二月から七〇年四月までの事であろうが、第一に「党の基本構造から切り離されたこと」と放言するとき、「基本構造」（ウ）というのは中央委員会、地方委員会、地区委員会、細胞のことを指しているのであろうが、RGは「党の基本構造から切り離されたこと」のではない。再度言っておくが、われわれは積極的に「切り離」したのである。

地区党所属のメンバーを、それらから「切り離」し、中央政治局の「軍事委員会直轄正規軍所属」「革命」にしたのであり、それはRGへの参加を「決断」した個々人によって革命戦士として、党に対して義務を果たさなければならないことを意味したのである。

まさに、この「切り離」す事の思想的、政治的意義をめぐって党内闘争をわれわれは闘ったのではなかったのか。「担」「切り離」した上で、RG政治局闘、地区軍団建設、UG建設、地区農民闘、軍の中の党の建設として新しい結合を追求したことを彼は忘れ去っている。

このアピールの筆者が「切り離」された」ときわめて被害者的立場事で「組織破防法と闘う集会」に参加した人達に訴えるとき、彼は、「党の基本構造から切りはなされた隊員達に対して、軍事組織を作ったことは誤りだったといっている事を意味する事を知らねばならない。党中央直轄の正規軍を建設することから軍事組織の建設を実現する路線が唯一の正しい道であったことは、第一次RGの建設の過程における先に述べた党内闘争分派、闘争の内実によって証明されているのである。

第二に、彼はつづけて言う。「隊員達は、地区からのビラ一枚ない生活を強制され、次の戦闘に至るまでの待期生活を強制されるのである。」（同）

「それは、日常的に刹那的感覚や、その防止策としての隊内共産主義、母胎論的イデオロギーを形成していくのである」（同）

彼は、「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」が「刹那的感覚」の防止策として「形成」されたと言う。

当時の恐実を知っている人達にとっては手のつけられない笑うべきこのアピールの筆者の相も変わらずの小ブルジョア的泣き事ぶりにふれて、我々は思わず彼の顔を想い浮べて全く馬鹿らしくなってまってしまうわけにはいかない。なぜなら彼のこの様な態度が、実際第一次RGの思想的総括に関する蜂火一派の核心をなしているからである。

「刹那的感覚」の「防止策」として「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」を「形成」してしまった第一次RGは、従って思想的にも敗北したとのみ彼らは「総括」するわけである。だがこの様な「総括」によっては、12・18路線の思想上の核心である「共産主義＝革命的実践」、マルクスの「資本主義批判」「反権の革命的意義を理解する事が出来ない。

なぜなら、「共産主義＝革命的実践」「資本主義批判」の復権を「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」が「刹那的感覚」という概念で描いている。

蜂火一派にとってすでに「伝説」化されているこの様な主張が全くの偽りにすぎないことは、すでに前期において詳しく述べたのであるから繰り返さないが、蜂火一派の立場に立ってしまうと、地区軍団建設（九一十月）、地区農開（十一十二月）、UG建設（七〇年一二三月）、全国政治展開（一一一月）、岡田論文をめぐる論争（十一一月）、原理論をめぐる論争（三一四月）そして更に隊の組織性格を大きく規定して思想上の党脆を克服したことによって、今日、蜂火一派は「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」は、誤りであるとすることによって、あたかも彼等自身はこの「ハンカ」に対して無関係であったかのように言うだが、その様な態度は、実は武装闘争・軍事組織の建設から何も学んでいなかったということを自ら告白しているにすぎない。

なぜなら、「隊内共産主義、母胎論イデオロギー」は反スタマルクス主義に思想的に立脚した六〇年代の新左翼が、武装闘争と軍事組織の建設を進めた場合、不可避的に経験しなければならなかった「成長の病」であったからである。

われわれは、この「病原菌」をRGのみならず、関西派フラクション、更に全党に植えつけようとしたのであり、この中でわれわれ自身の中に「抗体物質」を蓄積し「病」を治して、次の「成長」（12・18路線）をとげたのである。

実際、この「病」は、「成長の病」なのであるから、一定の「成長」（軍事組織の建設と武装闘争の開始）をとげない間は、決して発病しないのである。

今日、蜂火一派が、この「病」とあまり関係がなかったかの様な態度をとったり、又、少くとも自分達には責任がないという態度をとったりしているのは、彼らの指導的メンバーが、当時、RGや中央軍事委員会に所属していなかったということに尽きる。

彼らが、「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」を悪魔が来た様に恐れ、いみきらうのは、それが、武装闘争、軍事組織建設と結びついている事を直感的に知っているからである。

次の節からわれわれは「隊内共産主義、母胎論イデオロギー」について歴史的に考察していく。

この作業を行う政治目的は、第一に、われわれと蜂火一派との対立点を一層鮮明にすることであり第二に、かつての第一次RGメンバーの内、闘いつき倒れ、今は立ち上っている人が、今だ、われわれと連絡をとっていず、一人「総括」作業を行っている諸君に対するわれわれの「援助」であり、第三に、清算主義的総括を行っている赤軍派内諸派に対するわれわれの批判でもあり、第四に、共産主義革命の不可避性を確信し、革命戦争に立ちとろうとしている先進的労働者人民に対するわれわれの提助である。

月闘争後、軍隊は次の様なものであった。東京駐屯学生部隊（BL派系、後の日向派）は、11・16戦術上の日和見主義をRG建設そのものの否定に結びつけることによって腐敗した。東京駐屯労働者部隊（仏派系）は十一月闘争後、政治警察の攻撃によって多数の隊員が逮捕されることによって解体の危機にさらされていた。過去の反対派に転換しつつあった叛旗派終結軍事局反対派の立場に立った情況派（すなわち、党派軍団反対と「党内闘争を組織しつつ」との党内闘争を組織しつつ恒常的武装闘争と党の革命のためにわたり、それは思想的には、その組織観を支えている「さらなる組織的性格のものの批判に向わねばならない性格のものであった。

岡西駐屯部隊（関西派系）に対

いても論争は不可避であった。われわれは、当初より、綱領上では世界プロレタリア独裁、戦術的には中央権力闘争＝マッセンスト、恒常的武装闘争（九回大会補則提案）、遊撃戦争（「戦争論」）、組織的にはRG＝党中央直轄正規軍を主張して、RG建設を通って来たのであるが、十一月闘争の敗北を経験の機な一つの転換期の終りであって、わが党と軍事組織にとっては、それは、長く苦しい革命戦争への旅立ちがはじまったことを意味した。

それは、戦闘や組織の計画期とは異なった新たな意味あいをもって、党と軍事組織に迫るものであった。

われわれは終局的に何の為に闘っているのか、革命の目的は何なのか。

プロレタリア独裁とは何か、また、それはどのようにして実現することができるのか。

本命の勝利の物質的根拠はどこにあるのか？われわれはなぜ闘っているのか？

RGとは何か？党におけるRGの地位とはどの様なものか、又、その団結の質と存在様式とはどのものであるのか。

これらの問は、まず、RGの内部から発せられた。

10・11月闘争の中で広汎に自然発生的に生果されていた共産主義突撃隊的な気分と闘い、党と正規軍の目的、任務、組織性格を闘争の総括の上に確定することなくして長期にわたる武装闘争を組織しうるRGを再編、改組することは不可能である。

それらの問は、蜂火一派が言うように「日常的に刺激的感覚」（蜂火二七二号）から生果されたのではなく、秋の闘いをふり返り、長期にわたる党中央直轄正規軍として任務を果そうとより深く考えた場合、事態は九回大会路線の綱領戦術、組織をのり越えて進むことが不可避になっていることを背景にしていたのである。

これらの問に解答し、RG改組の進軍を明らかにしたのが、いわゆる「岡田論文」であった。

「岡田論文」は九回大会のRGに関する決定を「建軍の思想」として継承した上で、RGの目的、任務、性格を規定した点にその眼目があった。

「軍建設の目的」とは何か。これに対して「岡田論文」は「戦争の消滅＝階級の消滅」と規定している。階級の廃止を「階級の消滅」といったり、また「戦争の消滅」と言ったり、また「階級の消滅」としてとらえているといった理論上の混乱に関して指摘することが、ここで問題にしようとすることではない。

そうではなくて、党の終局目標や目的については明らかにしていず、その結果、あたかも、プロレタリア独裁を目的にしてしまっていた九回大会に対して三カ月の軍建設と武装闘争を背景にして「岡田論文」が目的の終局目標を「戦争の消滅＝階級の消滅」を規定したことが問題なのであって、このことの実践的意義は、政治的にはRG内部の急進民主主義的傾向の「軍隊」（岡田論文）へ改組する第一歩を意味したのである。

すなわち、急進民主主義は、資本家階級に対する労働者階級と経済的隷属を根底にして、資本主義社会における階級支配があることを見抜けず、階級支配の根源を国家権力の支配抑圧ととらえることによって、社会革命を従って、階級の廃止を問題とする事なく、単に国家権力の打倒と政治的奪権を要求するものであって、そのような考えは、実は武装闘争の時代にあっては、戦闘主義（共産主義突撃隊論もその一つの現われ）的組織の思想的背景をなしており、「岡田論文」は、これら急進民主主義的傾向と戦闘団主義的傾向の克服する為に、軍建設の目的として「戦争の消滅＝階級の消滅、共産主義論を問題にしたのである。

「岡田論文」は更に、それらの目的を果すためのRGの任務として、プロレタリア独裁権力の樹立と恒常的武装闘争（革命戦争）、地区政治闘争、地区軍団建設等を掲げた。ここでは、革命戦争の組織化及び実行のみならず、又、その為にも、党の革命に対してRGがどの様な態度をとるべきかをも問題にしたのである。

以上のRGの目的と任務からその組織的性格が規定された。

RG＝共産主義突撃隊論を急進民主主義、「軍の自然発生性」として批判され、RG＝党中央直正規軍としての組織的性格が強調された上で、九回大会の規定を発展させ「政治的軍隊」という定義を付け加えた。

隊を小隊－分隊－班に再編し、その「日常的存在様式」を「学習労働、訓練」に基づく班単位の「共同生活」と規定した上で「批判と自己批判」、「規律の自己点検相互点検」の風習いわゆる「共産主義的団結」を作り上げようとした。

この「岡田論文」に基づく関西駐屯隊の再編と波紋が成功した結果、地区政治展開や、十二月弾薬列車阻止闘争、七〇年一月、地区軍団との一連の電通に対する武装闘争、二月赤軍派中央軍との党派闘争を組織したのである。

「岡田論文」の最大の眼目の一つはRGの規律を「共産主義的団結」に求めた点にあった。

関西駐屯隊は、各隊員の共産主義者としての思想的、政治的、組織的訓練を学習、戦闘、政治展開、規律の厳守によって獲得し、その地平を踏まえて軍全体の「中央集権的強化」と「新しい団結の質」を作り出そうとしたのである。

軍の目的や終局目標を「戦争の消滅」「階級の消滅」と規定しながらも、それらの条件が資本主義社会においてどのように備されているかという事、それらを実現するにあたっての党や軍の階級闘争に対する原則を明らかにしていない限りでは（すなわち、何よりも労働者階級の経済的解放を通して、一切の階級支配の廃止もあるし、「共産主義的団結」をRGから党へ、党からプロレタリアートへと組織し、拡大しながら、武装闘争を展開することが「戦争の消滅、「階級の消滅」のためのプロレタリア独裁の準備であると言えられても無理はなかった。それは我々が共産主義革命の原則を獲得する上に至る過程での「成長の病」であった。

革命戦争が民主主義の徹底化、政治的平等のための闘いを自己目的化するものではなく、社会革命を要求した共産主義と政治の実現のための闘いであり、そのための軍の原則が痛切に求められざるをえないということを岡田論文は示したのである。

すなわち、共産主義を単なる理想としてしまい、その結果、現実の階級的実践の目的を国家権力の打倒に低めてしまう急進民主主義の克服が問われたのであった。その為には、まず、共産主義を天上から現実の「党的実践」（共産主義的団結）に引きづり降す事が必要だったのであり、その「党的実践」の中から軍の階級闘争に対する原則を導き出そうとしたのである。

「岡田論文」は先に述べた九回大会の次の命題がもっていた矛盾を実践的に克服しようとしたものである。

「四、党と軍の基準について、党の基準は、世界共産主義綱領である。綱領を認識し、その前衛としての組織である。

軍の基準は、世界プロレタリア独裁、世界戦略であり、国家権力に対する闘争の一致である。

この点を明らかにしない限り党が軍に解体されて、軍隊、軍団における問題、社学問、キムの独自活動、そのヘゲモニーの真髄は出来ない。」（共産主義13号P82）

この命題は、党の基本組織と別系列に建設した軍隊に対して、基本組織及び軍内の党が党の様な態度をとるべきかという事について言うこと、「社会主義を組織しようとする党」に飛躍し、革命されなければならないという問題であった。

まさにこの点において、問われたのは、社会主義を高度の上では現実に組織しようとするその点においてつき当ったのは、階級国家、赤軍そして労働組合、ソヴェト、コミューンの死滅がそれ自体として問われたという事、これである。

まさしく、これらの形成と死滅との統一体として、共産主義が問われたと言うことである。この統一こそが党だからである。」、「党と軍の統一こそが党だからである。」、「現代革命の条件と社会主義」P16）

「今日わが同盟の中心問題は、これらの世界プロ独や、「過渡期世界論」や、又、軍隊の組織化の問題が、それらの問題の根源的な基本的な、又、生命をわすれがちであるという点にある。」（同P18）

「田原論文」であった。

当時発表された田原理論には、「現代革命の条件と社会主義」に収録されている綱領委員会としての綱領論争の提案とこの論文の思想的背景を明らかにした「プロレタリア独裁への道Ⅲ」とがある。

軍隊は、党の基本組織と別系列に建設した軍隊に対して、党の基本組織及び軍内の党が党の様な態度をとるべきかという事について言うこと、「社会主義を組織しようとする党」に飛躍し、革命されなければならないという問題であった。

まさにこの点において、問われたのは、社会主義を高度の上では現実に組織しようとするその点においてつき当ったのは、階級国家、赤軍そして労働組合、ソヴェト、コミューンの死滅がそれ自体として問われたという事、これである。

まさしく、これらの形成と死滅との統一体として、共産主義が問われたと言うことである。この統一こそが党だからである。」、「党と軍の統一こそが党だからである。」、「現代革命の条件と社会主義」P16）

「今日わが同盟の中心問題は、これらの世界プロ独や、「過渡期世界論」や、又、軍隊の組織化の問題が、それらの問題の根源的な基本的な、又、生命をわすれがちであるという点にある。」（同P18）

彼は、国家権力の打倒、権力奪取を目標としたわが党と軍隊内の急進民主主義的傾向を清算する為に、「社会主義を組織しうる党」への「革命」を提起した。

問題は基本的には、正しく提起されたのである。

若干の混乱、すなわち、「まさしく、これらの形成と死滅との統一体として、共産主義が問われたと言うことである。この統一こそが党だからである。」という提起でさえ、「岡田論文」の意図を勢一杯受けとめており、「共産主義的団結」の現論的基礎づけを与えようとしたものであった。

彼は疎外革命論と宇野経済学との結合に反スタマルクス主義的理論的基礎があると、宇野弘蔵の社会主義理論と経済学を批判する事によって、わが同盟が組織すべき共産主義運動に関する理論的基礎を明らかにしようとした。

彼は、疎外革命論批判の理論的基礎に「労働と労働力の相互関係の問題の解明分析」を置き、「武谷も宇野の場合も、この労働を構造的に分析しなかった。」（プロレタリア独裁への道Ⅲ、P18）と批判した上で、「労働の構造的分析」を積極的に提起した。この問題提起そのものは、従来の生産力理論（疎外革命論も結局、この理論を徹底にしている）に対する批判の視点としては、正しかった。

彼は社会的分業の廃止を共産主義社会論の中心にすえ、「労働過程の変革について次の様に提起する。

「党及び赤軍が、第一義的任務として果さねばならないのは、まさしく、この労働過程においてであり、又労働過程の改革である。

それは「賃労働制」にかわる「労働審制」を、更に、「無償労働」におきかえる事……これである。」

「人が外的合目的性から内的合目性へと変化することなしには人が労働過程において、自からの労働と労働力をとりもどすことなしには、人は、真に、名実ともに労働過程の主人公となることなく、決して使用価値と価値との分離を止揚することは出来ない。

何故なら、まさに、その当の人の労働自体が、この分離を生み出しており、又、労働はその労働の当人にとって「この使用価値の生産として窮屈され、制限されている限り、この当の人の自然性、自然成長が、使用価値と価値の分離の原因をなしている以上、人間が自らの労働を開花させることによって、すなわち、労働を自己目的とすることによって自らの内に眠っている自然的人間的諸能力の発展をこそ労働の目的とすることができるであろう。」（プロレタリア独裁への道Ⅲ、P32）

「人が、労働を自己目的とする様に成長する程度にうれて従来の大衆組織、同盟、そして、党及び赤軍自体も消滅してゆくのである。」（同）

ここで、彼は、目的と終局目標に関する軍事組織内の論争に対して、その党側から一つの解答を与えようとしたものである。

すなわち、「岡田論文」が軍の目的を「戦争の消滅」、その終局目的を「階級の消滅」と規定したことに対して、「田原論文」は、党の目的を「無償労働の組織化」に、その終局目標を「階級の消滅」と規定したことによる、「自然的人間的諸能力の発展」「労働の開花」、その終局目標を「労働の自己目的化」を媒介とした「大衆組織、同盟、そして党及び赤軍自体」の「消滅」と規定する事によって、「岡田論文」では明らかにしえなかった「階級の消滅」（正しくは階級の廃止というべきである。）の内容をそれなりに明らかにしようとしたのであった。

だが、この主張が「田原理論」と呼ばれ、わが同盟の理論闘争史上に一つの位置をめるものとなったのは、この「無償労働の組織化」の内実を、次のような独自の体系へと純化したことにあった。

彼は言う。

「このような形で、労働力及び労働のあるいは労働過程を、本質論原理論（共産主義を人）社会主義をこの為の段階論あるいは実体論として整理し、資本主義をその現象論、現状分析とすべきではなかろうかと考えるのである。」（プロレタリア独裁への道Ⅲ、P17）

「この統一、あるいは統一体の本質の対象化は共産主義として、又、その実体的、構造的な問題は社会主義として、又、これらの現象的あらわれが、個々の党や、軍やソヴェト等としてあらわれているにすぎないということであり、（「現代革命の条件と社会主義」P17）

この内容が、「田原理論」の根本であった。すなわち、共産主義社会を本質、社会主義社会を現象とし、今日の資本主義社会を現象として把握するということは、言いかえれば、共産主義社会を正しく認識することが、共産主義運動にとって、根本問題であるということを提起しているのである。

実際、先に紹介した労働論も、この問題設定の枠組みに組みたてられている。すなわち、彼は、外的合目的性に規定され、生産物の生産を目的とする資本主義社会の賃労働に対し、労働が内的合目的性をもつものに転化する共産主義社会における労働過程を対置しうる未来の労働を獲得する為に、賃労働制を労働証書制におきかえるのみならず、無償労働を組織化しなければならないと主張したのである。

だが、このように、実現すべき未来社会を一つの社会状態としてえがき、共産主義運動をそれに向う運動として考えることは誤りである。ドイツイデオロギーのなかで、マルクスも次のように言っている。

「共産主義はわれわれにとっては、つくりだされるべき何らかの状態、現実が則るべきなんらかの理想ではない。われわれが共産主義とよぶものは、現在の状態を廃止する現実的運動のことである。この運動の諸条件は、今、現に存在している前提から生じる。」

もちろん彼は、この有名なテーゼを知っている。彼は、「現代革命の条件と社会主義」（P20）では、このテーゼを引用した後、

「うんと同志諸君、なかなかもしろくなって来たではないか。

この「過渡期世界の階級闘争の質」の現状、そしてこれを「止揚する現実の運動」これである。

全く奇妙なことになって来た。だがこれが現実である。」

ここで彼が「現実の運動」と語っているのは、すでにみたようにあくまでも、未来社会としての共産主義社会の認識に立脚した「現実の運動」ということであり、マルクスの言う「現在の状態を廃止する現実的運動」とは異なっている。何故なら、マルクスは「この運動の諸条件は、今、現に存在している前提から生じる」と主張しており、未来の社会状態の認識を運動の諸条件にはしていないからである。

次にわれわれは「田原理論」の資本主義批判にのりこむ前提から明らかにしておかねばならない。

彼は、「労働の構造的分析」を「労働のものに根拠もつ「分業」として」とらえ、そして、この労働の内在的矛盾を使用価値と価値との分離としてとらえた。

彼は、「生きた労働」＝労働力の存在と「商品に対象化された労働」＝商品ないし生産手段との区別出来ず、その結果、「生きた労働の二面性」を「二重性」ととらえた上で、その「労働の内在的矛盾」を「無償労働」によって「止揚」しようとしたのである。

資本の直接的生産過程における「生きた労働の二面性」とは、一方における労働力の消費と商品の価値の維持と、他方における新生産物への一定分量の労働時間の追加としての新価値の附与であり、これは、一つの過程の二面ではあっても、「二重性」（二者論争的性格）ではない。

二重性とは商品に対象化された労働に関していえば、それは商品交換において、抽象的人間労働として、その使用においては具体的有用労働として別々にあらわれる。

「生産過程における「生きた労働」は、価値の実体たりえないばかりか、それは「対象化された労働」＝「死んだ労働」と、その結果「対象化された労働」の旧価値を維持しつつ、自からは消耗し尽くしその結果が一定量の労働量としてまさしく資本の生産物に対象化されてしまうことが押えられねばならない。」（共産主義14号P一六四）

彼は、「労働の構造分析」を「生きた労働の「内的矛盾」ととらえることによって「対象化された労働」を明らかにしえず、それ故、資本主義的商品生産を正しく把握できていない。その結果、「価値と使用価値との分離」すなわち価値法則の存在根拠を資本主義的生産様式に求めず、労働そのものに内在する矛盾として把握しているのである。かくて彼は資本と資本家を見えず、従って資本家と労働者の現実の階級関係を解明出来ず、その結果、資本主義社会とそこにおける労働者階級の経済的地位を従って、労働者階級の革命的能力と社会主義革命の物質的諸条件がどのように資本主義社会において準備されているかを明らかにする事が出来ない論理的出発点を設定してしまったのである。

この様な彼にとっては、現実の資本主義社会が共産主義社会の「現象」と思われてもむりはなかった。

結局彼は誤った資本主義批判に陥いり「今現に存在している前提」を正しく解剖することができなかった結果、「現に存在している前提」を共産主義社会（本質）、社会主義社会（現象）の現象という具合にとらえざるをえず、当初の良き意図にもかかわらず、党の革命と軍の組織のためのすなわち行動の指針となるべき理論を提出することができなかった。

彼がスターリン主義の「国社会主義可能論、生産力理論」に対して

反スターリン主義が時代区分の明確化という点においてしか批判しえていないことを批判し、プロレタリア独裁と社会主義の時期における共産主義的運動の内容（いわゆる共産主義的運動の二段階論）を明らかにしようとしたこと、プロレタリア独裁権力は共産主義の第二段階を目標として組織されねばならないこと、あるいは、プロレタリア独裁における一党独裁の意義と不可避性など、彼の提起の根底的な意義をもった部分を我々は現在でも継承している。

だが彼は未来社会論に陥いる事によってプロレタリア独裁の不可避性、共産主義革命の物質的根拠を明らかにする事が出来ず、従って、それらをどの様に実現していくのかという点での実践的解答を与える事が出来なかったのであり、それ故、党の革命のためのフラクションの改組が要求されていた段階で十分その任務をはたす事が出来ずフラクションの指導部を自ら退かねばならなかったのである。だが、われわれは、共産主義論争、宇野批判に対してはたした彼の役割すなわち、12・18路線の前夜に果した彼の理論的役割を決して低めてはならないと考えている。

一方では、この田原論文の綱領上の問題提起を受けとめ、他方における軍事委員会の諸論文、「岡田論文」の実践上の問題提起を受けとめた「関西派」によって第六回中央委員会（七〇年三月）に提案されたのが「党の革命と民族解放共産主義的四類の形成にむけて」（政治局提案第二章）であった。

この議案第二章の政治的目的の第一は、提起された「田原論文」を中心とした綱領委員会を政治局直轄機関として建設する事、第二は、軍事委員会、RGにおける論争の本質的問題を明らかにし、更にその事によって、4・28武装闘争の準備を進めていた地区軍団が直面していた問題に答え、第三にすでに2・14以降はじまっていた党内闘争の性格と目標を規定しようとした事である。

提案の眼目は理論的には二つである。

その一。

「何が実現されたら社会主義か？という問は、一般的基準として明らかにしうるのみでなくとも革命党の綱領的内容としては不適格である。また革命のための様な過程を経て社会主義に至るかという問題提起も無点をとらえたものではない。」

「共産主義運動が、未来社会の基準ではなくて、今日のプロレタリア内部の党派闘争の中に生きていること。そして、党がその共産主義運動に注目し、そこから党の基準を形成しない限り、帝国主義を打倒しえない事。」（第二章）

「田原論文」が「未来社会の基準」を明らかにし、それを認識することによって党と軍の「団結の質」を変革しようとしたのに対して、ここでは、共産主義運動をめぐる現実のプロレタリアート内部の党派闘争に注目して問題提起を行なうことによって党の原則を明らかにしようとしている。

その二。

「われわれが、新しい質の組織活動にとりかかったと必ず直面するところの新しい困難、これは例えば、共同生活や、財政一元化や、労働の提供等々としてあらわれているが、これらは、従来のブルジョワ的価値観から判断されるのではなく、その解決の中に、新しい価値観を形成してゆかねばならないのである。」

「一九一七年ロシア革命以降のロシアにおける共産主義運動がどの様な過程で崩壊したのかを明らかにし、今日共産主義運動が勝利しうる根拠を明らかにすることとして、過渡期世界論を再構築すること。」

「一九一七年ロシア革命以降の様な過程で崩壊したのかを明らかにし、今日共産主義運動が勝利しうる根拠を明らかにすることとして、過渡期世界論を再構築すること。」

このことは、党が共産主義社会の母胎であるとか、共産主義的人間の形成が党の任務であるとかいった規定に根拠を与えるものではない。

むしろ、帝国主義とスターリン主義に対する闘争において党が共産主義的団結を形成しない限り勝利しないという事であり、その様な問題が提起されていることこそが世界同時革命の現実性なのである」（同）

ここでは、RGの規律と「共産主義的団結」（『烽火』派はこれを「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」と言っている。我々も便宜上その横に述べておいた）の実践的意義を評価し、それを当時提起していた地区軍団に「移殖」しようとしながら、同時に当時「左派」M-Lによって提起された党内闘争の根拠地論を盛り込んだ党の共産主義的人間の形成」によるソヴェト主義批判という第一次左派フラクションの主張を批判し、スターリン主義との党派闘争の問題として党の共産主義的団結を位置づけ、過渡期世界論を再構築することによって、「今日共産主義運動が勝利しうる根拠」を明らかにしうるとされた。

二の考え方は「岡田論文」が、規律問題を現実とした組織問題として、共産主義的団結（隊内共産主義、母胎論的イデオロギー）を獲得しようとしたのに対して、それのみならず、そのクク組を綱領問題にたげることによって、「共産主義運動が勝利しうる根拠」を解明しようとする点に到達したのであり、その事は、RG内から提出された「革命の勝利の物質的根拠はどこにあるのか？われわれはなぜ闘っているのか？」といった問に対する解答に一歩接近した事を意味した。

「隊内共産主義、母胎論的イデオロギー」と言うと、スワノ神奈川左派の復活とわめき立てる蛾火一派は、それらが、わが「関西派」第一次RGの実践の中で、階級闘争に対するマルクス主義の原則に関するすべてではないが多くの問が「岡田論文」の作製過程の中で、またそれ以降も本質的な形で提起された事。

すなわち「われわれは経済的に何のために闘っているのか」「革命の目的は何なのか」「プロレタリア独裁とは何か？又、それはどの様にして実現する事が出来るのか？」「革命的勝利の物質的根拠はどこにあるのか？」「われわれはなぜ闘っているのか？」「RGとは何か？」「党における RGの地位とは？」「RGの団結の発生存在様式とはどの様なものであるべきか？」といった問が提起された事。これらの問に対する解答を、情況、叛派派、自向派、仏派、神奈川左派との党内、分派闘争の中で「関西派」が獲得したこと、この事が、逆に、党内闘争に対する「関西派」の勝利へ、12・18路線、をもたらした原動力であった事を知るべきである。

従って、次の課題は、党内闘争の中で「関西派」が、それらの問に対してどの様な解答を与えていったのかを明らかにすることとなければならない。

（注〇一九七〇年党内論争、党内闘争の経過

69・12　第四回中央委員会（岡田論文）。共産主義論争開始

70・1　第五回中央委員会（軍事委員会論文）

2　綱領委員会再開。神奈川左派フラクションとして登場。赤軍派と党派闘争。

3　「田原論文」を凝縮した党内論争開始。第六回中央委員会において公然たる党内闘争開始。情況派追放。

4　ML派との党派闘争。いわゆる三人委員会の結成。

4・28闘争。

5　第七回中央委員会、六月闘争実行委員会への中央委員会の解体。情況派除名決定。

6　叛旗派追放。「理論戦線NO9」に日向論文発表される。

7　第八回中央委員会。叛旗派除名決定。

8　「烽火」再刊号。関西派によって発行される。「左派」NO2神奈川左派から発行される。

9　「赤報論争」

10　関西派、神奈川左派合同理論委員会発足。

11　神奈川左派党＝共産主義の母胎論、永続世界革命戦争論を撤回。第九回中央委員会開催をめぐって日向派と分裂。

12・18ブンドの結成。

12　「共産主義」14号発行。

71・2

(オ)「共産主義」と「赤報論争」

七〇年、四・二八、RG、地区破壊戦に除名反対した日向派は、第七回中央委員会（七〇年五月）に、公然たる軍事反対派として登場した。（われわれはやっと第七、八回中央委員会で除名された。）

情況、叛旗派の改組要求は、第七回中央委員会（七〇年五月）に、公然たる軍事反対派として登場した。（われわれはやっと第七、八回中央委員会で除名された。）

情況、叛旗派については、なぜなら、彼らはRG建設を正式に決定した九回大会以降に一貫したRG反対派だったのであって、従って、彼らとの分派闘争そのものから、RGの総括をめぐる本質的な教訓を導くべき内容は当然生まれるはずがなかったのである。

だから、RGの総括をめぐって、従って、彼らとの分派闘争を正式に決定した九回大会以降に一貫したRG反対派だったのであって、従って、彼らとの分派闘争そのものから、RGの総括をめぐる本質的な教訓を導くべき内容は当然生まれるはずがなかったのである。

脱走兵に対するわれわれの自己批判要求に敵対した日向は、脱走を合理化することを公認することによってはじめて「党の革命」に対する彼の態度を確定しえた。東京地区軍団の中央委員会に登場した。

脱走兵に対するわれわれの自己批判要求に敵対した日向は、脱走を合理化することを公認することによってはじめて「党の革命」に対する彼の態度を確定しえた。東京地区軍団の中央委員会に登場した。

日向は、六九年十一月闘争以降、脱走し、解体したRG宮前駐屯地の生部隊の実践に組織的に立脚して、情況、叛旗派の改組要求は、第七回中央委員会（七〇年五月）に、公然たる軍事反対派として登場した。（われわれはやっと第七、八回中央委員会で除名された。）

情況、叛旗派については、なぜなら、彼らはRG建設を正式に決定した九回大会以降に一貫したRG反対派だったのであって、従って、彼らとの分派闘争そのものから、RGの総括をめぐる本質的な教訓を導くべき内容は当然生まれるはずがなかったのである。

日向は、六九年十一月闘争以降、脱走、解体したRG宮前駐屯地の生部隊の実践に組織的に立脚して、情況、叛旗派の改組要求を

又、党とRGの「団結の質」については、共産主義＝革命的実践という立場にもとづいて、従来の「母胎論的傾向」を総括して、次の様に規定した。

「その共産主義的団結とは、共産主義社会のあるべき人間関係をあれこれ想定して、その様な団結を実現するということではなく、まさに綱領に明らかにされた基盤以外の一切の見解や行為を、いずれもその基準から批判の対象として考えることによって、プルジョア社会が生み出しているあらゆる人格的、職能的、その他、もろもろの相違をのりこえた団結を実現出来るという意味において、すなわち、プロレタリアートの組織性が最高度に発揮された団結を実現出来るという意味で、その団結の最高の形態なのである。」（同P27）

以上、「烽火再刊号」で明らかにされた当時の「関西派」の立脚点にもとづいてフラクションと革委員会は、日向派との党内闘争の勝利のために第一次RGをフラクションに組織した。

RGを産主義的政治を実現する「政治軍隊」として再編成するためには、何よりも共産主義の理論を学習する事から始めねばならなかった。なぜなら、共産主義革命に対する正しい立場は実践による経験のみでは決して獲得することはできず、マルクス主義の学習や理論闘争を自覚的、計画的に組織することによって獲得しうるからであり、その理論の組織的学習もまたRGの実践の一つなのである。

だが、われわれは、その様な態度で学習を始め、日向派に対する闘争の武器を研ぎつつも、その学習をどの様に組織するのかという点で、曖昧であった。

すなわち、日向派との党内闘争を組織しつつ、「関西派」の手で党の革命を進めるためには、何よりも「関西派」内部の理論闘争をどのように組織的に進めるのかという点において。

とりわけ、軍事委員会とRGは隊編成を維持しつつ、学習と理論闘争、思想闘争を組織しえず、その結果、「組団生活」になる事によって政治警察との闘争において、かなりの敗北（逮捕）をきした。

七〇年夏、軍事委員と多数のRGの逮捕を契機にRGの党内での論争の深化をつくった。

日向派との党内闘争と政治警察との闘いを背景に組織されたいわゆる、RG内「赤報論争」（七〇年九月十一月）の最も本質的な問題は、すでに「関西派」が「烽火再刊号」で理論的明らかにした、共産主義＝革命的実践という思想的立場に立って、「破壊」されたRGの再建をどのような組織思想にもとづいて行うのかという点にあった。

「通信兵」（ペンネーム）に対する「突撃兵」と「狙撃兵」の論戦の第一の内容は共産主義に関してである。

「通信兵」は、同志の逮捕に衝撃を受け、次の様に言う。

「獄中生活」二年では自分は何の為に何故やったのか、あまり真剣に考えないかもしれないが、もし十年二十年そして無期、死刑となると彼は自分の一生かけたものを真剣に問いつめるだろう。

その時に、革命が共産主義の内実が、無期や死以上のものとして科学的、論理的につかめていないならば、彼の進む方向は明らかである。……共産主義者としては科学的、論理的に死を明確に克服する方が望ましい。RG隊員は、そういう変をもったものでなければならぬし、RGの日々の闘争、活動は、そういう隊員を作り出す内実を持ったものであるべきだ。」（「赤報」No.1、七〇年九月当時のRG内部通信）

「通信兵」は、ブルジョア国家権力と自分という肌に問題をたてしまった結果、いうならば、階級闘争が資本家階級に対する労働者階級の経済的搾取を根底にして両階級の利益が真向から対立している事に根拠をもっている事、従って共産主義が労働者階級の隷属からの解放をめざした党と労働者階級の組織的「実践」である事を見抜けず、その結果、共産主義を自分の投獄や死の苦痛を克服する「論理」「認識」にしてしまった。

この「通信兵」の共産主義観に対する当時の「突撃兵」の批判はRG再建の思想的核心の二つをらえたものとして重要であるので少し長くなるが引用しておく。

「彼（通信兵）は、第二次ブロ中の『特攻兵』にでもなったつもりで、「神頭」を要求しているのであろうし、又、彼はそういったものとして、「革命」と「共産主義」を把えている。我々は「死を克服する」ということについては「死ぬ」以外に、「死ぬことによって」のみ克服出来ると考える。

そして我々は、「死をも恐れず」に闘いぬく職士（サイボーグでなく生きた人間）を創り出すは共産主義のアンコレの論理や、方針でなく、将に共産主義運動そのものであり、革命そのものの中に自らの主体を形成する作業にもってのみ可能となるのである。

彼は結局「一の為に」という大義名分を欲しており、その様なものは念仏を唱えることにしかならない。我々は×月の闘争において、そのことを総括できる。

自らがその運動の未来を、勝利を主体的に担っているという把握＝理解＝主体的確認を通して、状況に関っていく、その様な中において形成することが出来るということである。

彼のこうした「共産主義＝革命」と「無期刑＝死刑」を対比させた思想は、小ブル投機的革命者としての自己を「思う存分に」暴ったものでしかない。この考え方の延長には、共産主義運動が、革命的目的意識性とは共産主義に外ならない。

その目的意識性を思想闘争によって不所所に＜純化＞し、それを、＜組織性、規律性＞として具体化する。

＜組織性、規律性＞は、日々獲得していかねばならない。日々の具体的実践的活動の中で獲ちとっていかねばならない。RG共同生活は、我々が「平時」から、軍隊としてあろうとするときに問われる＜組織性、規律性＞の獲得の場である。

無政府主義、水平主義、絶対的均等主義を排し、一〇〇％の主体的統制、自己規律の＜RGへ＞本質有の＜組織性、規律性＞こそ、自由である。」（狙撃兵）

以上の「通信兵」に対する「突撃兵」「狙撃兵」の見解に対して、「隊内共産主義」だ「母胎論的イデオロギー」だとさわぐのであろうが、「突撃兵」や「狙撃兵」の見解こそ「岡田論文」の根本思想を継承しながらも、「岡田論文」以降、二つの組織的傾向としてあった「共産主義的人間の形成」「隊員の思想的強化を通じて隊全体の強化を勝ちとる」といった組織観を克服する第一歩を確立したものと評価する。

彼等は、共産主義を隊の個々の人間関係の「革命」におくのではなく、RGを党の一機関と位置づけることによって、党総体の思想的、政治的、組織的強化を問題にし、共産主義を「党的実践」としてらえ、その実践の中心問題を当面党派闘争、党内闘争、フラク内思想闘争、RG内思想闘争と共同生活、規律の再確立においたのである。

一方、「通信兵」の見解は、「岡田論文」が提起した「共産主義的団結」の内容を「一個の共産主義者と一個の共産主義者の間の関係」の「革命」に「純化」してしまい、共産主義を「一個の共産主義者の」「認識」の問題にしてしまうことによって、「革命的実践」の立場を否定し、RG建設と革命戦争否定への道に通じるものであった。

実際、「通信兵」の様な見解はその性格は、異なるとはいえ、党内の一大分派を形成していた。

日向派が、それであって、六八年防衛庁闘争、東大闘争の獄中組の一部分、六九年十一月闘争からの彼らは、「国家権力と自己」と問題をたてしまった結果、武装闘争＝革命戦争を否定し、RG建設に敵対して、個人の認識の体系として日向理論を作りあげざるを得なかったのである。

「通信兵」に対する「突撃兵」「狙撃兵」の批判は、「通信兵」が、RGの従来の成果を一切否定する方向に道を開こうとしていた点をおいて日向派との党内闘争の試金石をなしていたのである。

七一年秋の分派闘争において、「突撃兵」や「狙撃兵」が、旧神奈川左派の脱走に対する闘争を放棄し、その結果、旧神奈川左派と又もや、烽火一派の諸君は、「隊内共産主義」だ「母胎論的イデオロギー」だとさわぐのであろうが、「突撃兵」や「狙撃兵」の見解こそ「岡田論文」の根本思想を継承しながらも、「岡田論文」以降、二つの組織的傾向としてあった「共産主義的人間の形成」「隊員の思想的強化を通じて隊全体の強化を勝ちとる」といった組織観を克服する第一歩を確立したものと評価する。

彼等は、共産主義を隊の個々の人間関係の「革命」におくのではなく、RGを党の一機関と位置づけることによって、党総体の思想的、政治的、組織的強化を問題にし、共産主義を「党的実践」としてらえ、その実践の中心問題を当面党派闘争、党内闘争、フラク内思想闘争、RG内思想闘争と共同生活、規律の再確立においたのである。

一方、「通信兵」の見解は、「岡田論文」が提起した「共産主義的団結」の内容を「一個の共産主義者と一個の共産主義者の間の関係」の「革命」に「純化」してしまい、共産主義を「一個の共産主義者の」「認識」の問題にしてしまうことによって、「革命的実践」の立場を否定し、RG建設と革命戦争否定への道に通じるものであった。

実際、「通信兵」の様な見解はその性格は、異なるとはいえ、党内の一大分派を形成していた。

日向派が、それであって、六八年防衛庁闘争、東大闘争の獄中組の一部分、六九年十一月闘争からの彼らは、「国家権力と自己」と問題をたてしまった結果、武装闘争＝革命戦争を否定し、RG建設に敵対して、個人の認識の体系として日向理論を作りあげざるを得なかったのである。

「通信兵」に対する「突撃兵」「狙撃兵」の批判は、「通信兵」が、RGの従来の成果を一切否定する方向に道を開こうとしていた点をおいて日向派との党内闘争の試金石をなしていたのである。

七一年秋の分派闘争において、「突撃兵」や「狙撃兵」が、旧神奈川左派の脱走に対する闘争を放棄し、その結果、旧神奈川左派と

※　※　※

※　※　※

※　※　※

× × ×

我々は、次号に於いても、本号の続きとして、旧神奈川左派の「党＝共産主義の母胎論」「水瓶世界革命戦争論」に対する「関西派」の闘争、及び日向派との分派闘争と12・18路線について述べ、第一次RG建設をめぐる共産主義論争・戦術論争・組織論争を我々がどの様に解決したかを明らかにし第四章では、われわれ共産主義者同盟（RG）が進めている政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とした党建設に関する組織思想を述べるつもりである。

われわれの間で中間主義的な態度に陥いり、脱落したにもかかわらず、「赤報論争」において、彼らの二人のはたした意義は消える事はない。

当時の「赤報論争」と比べれば今日の烽火一派の主張は通信兵」以下である。

なぜなら、「通信兵」は、RGの荷軍を客観的には強力に進めていたにもかかわらず、彼は、主観的には都市ゲリラ戦を主張し、共産主義を問題にしていたのに対して今日の烽火一派は「赤報論争」を忘れさりRGを荷軍して、「職士＝組織者」なる合法党の建設に精を出しており、又、革命戦争を「放棄」した上で「蛇足の補型づくり」なる大衆運動主義に堕落しているのみならず共産主義と民主主義を折衷し、その結果、共産主義革命を忘れて、民主主義闘争に専念しているからである。

× × ×

我々は、次号に於いても、本号の続きとして、旧神奈川左派の「党＝共産主義の母胎論」「水瓶世界革命戦争論」に対する「関西派」の闘争、及び日向派との分派闘争と12・18路線について述べ、第一次RG建設をめぐる共産主義論争・戦術論争・組織論争を我々がどの様に解決したかを明らかにし第四章では、われわれ共産主義者同盟（RG）が進めている政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とした党建設に関する組織思想を述べるつもりである。

共産主義16号を近日中におとどけする。

共産主義14・15号は、反革命革命派に屈服した日向派との激烈な党内闘争の中から生まれた。ここで我々が主張した資本主義批判、主体性唯物論、宇野経済学に基礎をおく反スタマルクス主義をイデオロギー的に解体・止揚すること、この反スタマルクス主義を思想的よりどころとしてきた日本の新左翼運動全体を過去のものとし、革命戦争の時代にふさわしい共産主義者党の思想的基礎を作りあげる事を目標として提出されている。

この我々の資本主義批判が七十年代初頭の革命戦争派内の理論闘争において果した役割りについて、いささかの誇りをもつ事は我々に許された権利であると考える。

共産主義16号は、この誇りある14・15号を継承するものである。継承するばかりか、この資本主義批判に基づく党建設が、どんなに大きな果実を実らせるか、そして一面でどんな激しい党派闘争が要求されるかを証言するものである。

一方で連合赤軍の完全敗北としてあらわれた革命戦争の高揚の中で、我々共産主義者同盟（RG）が、資本主義批判をしっかり我がものとして、いかなる党建設と革命戦争の道を歩んでたかを歴史的に証言するものとして、この共産主義16号は発行される。

読者諸氏がこの党建設の意義をしっかりと把握されることを願うとともに、仮借なき批判を期待し、暖いご厳進を願う。

＜共産主義者同盟（RG）中央委員会＞

共産主義16号

近日発売・定価550円

（内　容）

第一部　主　張―当面する革命戦争の更なる発展のために

第二部　共産主義者同盟（RG）結成に向けての党内―党派闘争

（A）我々の立脚点と世界革命戦争

（B）烽火一派との対立点

（C）神奈川左派との対立点

（D）党内―党派闘争に関する記録文書

第三部　連合赤軍との党派闘争

（A）連合赤軍の闘争に対する我々の態度

（B）連合赤軍の党的破産と国際非合法党建設の道

（C）連合赤軍に対する日共革命左派の態度

（D）革命戦争の旗をおろした八木君のレーニン主義について

赤軍派の分派闘争に対する我々の態度

═『塩見孝也論叢』の批判═（下）

《目　次》

（上）―9号掲載
㈠ はじめに
㈡ 塩見君の連合赤軍に対する態度
① 塩見君の自己批判
② 塩見君の連合赤軍に対する態度
③ 組織総括における調停主義
（下）―本号掲載
㈢ 塩見君の連合赤軍に対する態度
④ 「前衛の軍人化」「軍の中の党」について
④ 再び塩見君の調停主義について
㈣ 「前衛の軍人化」「軍の中の党」の簡単な総括
㈤ 中央軍一元主義は赤軍派の組織路線の心然的帰結
㈥ まとめ
《追記》

（二）塩見君の連合赤軍に対する態度

④「前衛の軍人化」「軍の中の党」について

■我々は「赤報」9号において、塩見君の連合赤軍に対する反動的総括を批判し、彼が連合赤軍の組織総括を回避して思想・綱領問題に問題を還元することにより、現情問題を革命戦争を組織する非合法党の規律問題として総括できず爾後＝反動と単純に規定し、当初の彼の彼の銃撃戦支持という正しい階級的立場を動揺させていることを批判した。そして、塩見君の連合赤軍に対する反動的総括は、彼の第二次赤軍派に対する組織総括の調停主義的性格と根拠を持っていること、彼は第二次赤軍派における中央軍と革命戦争との対立として現象した党内問題に対する調停主義の立場に立って中央軍一元主義に反対しており、このような組織的立場から、スターリン主義経済学に陥んで屈服した資本主義社会の「体系」の復権を説教しているとしきない事を指摘した。塩見君は連合赤軍結成から新党結成へと第一次赤軍派が進んでいったことを、7・6事件以降の「軍から党」という赤軍派創成以来のドブレ流の組織路線の必然的帰結として承認すべきであり、中央軍一元主義を防ぐためにどのような組織改組を行うべきだったのかについて、思いめぐらすことをやめなければならないこと、問題は中央軍一元主義、新党結成へと歩む中において、第二次赤軍派の「前衛の軍人化、軍の中の党―人の要素」「共産主義化」及び革命戦争路線が、どのような問題につきあたっていたのかを分析し、そこから教訓を学ぶことにあるのだ――というのが前節における我々の結論であった。

さて、我々が、この論文の執筆を進めていた段階で森恒夫君の、「遺稿」（金証編集委員会編）が出版された。幾つかの箇所の中で森君は我々が辟しし知ることのできなかった様々の事実について述べており、我々は途中まで書きあるえなかった。この論文が、「赤報」10号ではなく、11号に掲載されることになったのは、このような事情からである。我々は森君が明らかにした事実問題についてのみ必要な限りでとり上げながら塩見君の批判にしぼって論を進めたい。

〈人生、森君の「遺稿」に関して我々がここで結論的に言えることは、森君は結局赤軍を消算的に総括しないまま死んだということである。

何よりも問題なのは、彼が自分の「党主義」「個人独裁」を清算していることである。問題は中央集権主義の組織思想をどう具体化するかにあったのであって、森君の「遺稿」に関して、森君は結局赤軍を消算的に総括しないまま死んだということである。

何よりも問題なのは、彼が自分の「党主義」「個人独裁」を清算していることである。問題は中央集権主義の組織思想をどう具体化するかにあったのであって、森君の一般的な「党主義」「個人独裁」論の復活の事実について、「前衛の軍人化」「軍の中の党」の簡単な総括

④「前衛の軍人化」「軍の中の党」について

■「……特に指導者の自己批判の作風は非常に重要な位置を占めると思います。この論文が、「赤報」11号に掲載されることになったのは、このような事情からである。我々は森君が明らかにした事実問題についてのみ必要な限りでとり上げながら塩見君の批判にしぼって論を進めたい。

〈人生、森君の「遺稿」に関して我々がここで結論的に言えることは、森君は結局赤軍を消算的に総括しないまま死んだということである。

何よりも問題なのは、彼が自分の「党主義」「個人独裁」を清算していることである。問題は中央集権主義の組織思想をどう具体化するかにあったのであって、森君の「遺稿」に関して

このような戦術観は、10・8羽田闘争以降のビン・ゲバ闘争の急速な発展に根拠をもって、一時期の革命的左翼の主張となった。第二次ブンドが主張した「中央権力闘争—マッセンスト」はこの戦術観の定式化であって、この定式は、次第に中央権力闘争＝武装蜂起とする考え方を生み、69年4・28霞ケ関政府中枢占拠闘争の敗北の総括として、赤軍派フラクションによって主張された前段階蜂起の戦術こそ、この強迫民主主義的な戦術観の最も極端なかたちでの表現となったのである。（この戦術が政府中枢占拠を目的としたことの急進民主主義的な誤りについては「赤報」2号参照）

70年6月における秋の「蜂起」のとりやめ、それ以降いわゆる第二次綱領論争を経て、赤軍派は臨戦体制論で最後までゲリラ戦へ踏躍せず、不完全な非合法の敗北へ押し上げられるように、独立戦闘団化へ入っていく。もっとも一面では、七〇年からずっと唯革命戦術をとろうとしていく中で、特に七〇年末には反人民的ギャング的行為を行っています。（このことも未総括でM塩見孝也発言簡）

「塩見孝也発言簡」は、後の赤軍派の遊撃戦術におけるせん滅戦至上主義と結びついており後の赤軍派における戦術上の主要な傾向の一つであること。すなわちせん滅戦至上主義は一点突破全面展開」あるいは「革命的敗北主義」といった自然発生性への押跪とつながっている。

71年M作戦を戦術的に理論すけた「赤軍」8号における中央軍の遊撃戦と労働者階級のゼネストとの結合による武装蜂起の勝利という、いわゆる「都市ゲリラ論」は当然にも第二次赤軍派の綱領・組織・戦術総体の総括によってのみ、第二次綱領論争の不徹底（この綱領論争では、赤軍派は「赤軍」NO4の歴史哲学を総括できず、逆に当時の第二次ブンド内の日向派と我々……関西フラク……との論争から、それも日向派から影響されたりしていう）、いわゆる、「都市ゲリラ論」

（これは塩見君の「再総括」にもとずいたもの）できず、中央軍のヘゲモニーと遊撃戦と強調されながらも、遊撃戦の発展の結果としての武装蜂起という戦術観と、ゼネストから武装蜂起という戦術観と折衷されたものであった。連合赤軍の銃撃戦と党の敗北に至るまで、赤軍派は労働者階級自身が自に遊撃戦を闘わなければならないのであり、革命党が労働者階級の遊撃戦への決起を準備し、促進していかなければならないという考え方には達に立たなかった。彼らは根本的なところで労働組合主義的政治への屈服＝自然発生性への押跪を持ったまま、遊撃戦術を採択したのであり「中央権力闘争—マッセンスト」論から前段階蜂起戦術へ導き出した誤った「貧本主義批判」論に基づいて、赤軍派は「貧本主義批判」を、「藤本進治の『革命の哲学』のプロレタリアートの二重性の内的矛盾の自己展開の弁証法的構造を踏まえた上でこれを実践的主体から把握し直した（「赤軍NO2「赤軍派同志への私の自己批判」坂本均＝塩見孝也）とうたい、「赤軍NO2「赤軍派同志への人類史の道程としての時代に於ける人間の位相転換を通じた真に自然や社会に対する革命的人間の成立」（「赤軍」2号坂本＝塩見自己批判書）を獲得した党—軍は歴史的体現者であり、この「すでに類的存在を内包」（「赤軍」2号「反戦闘争の今日的意義と世界革命戦争」）した党—軍（統一戦線）の水統的発展、運動として共産主義運動があり、その結果として共産主義社会（赤軍派にとっては真の人類史の開始）の建設があるとされたとすれば、当然にも党—軍内部の「共産主義的人間関係」の形成としての「共産主義化」は最も中心的な赤軍派の綱領となり、組織規律を支える基準となったのである。「共産主義運動は党と軍の結合を起点として、軍と統一戦線（人民）の結合を媒介に機動戦と陣地戦を結合しつつ、生産関係、教育、文化、家族、男女関係と拡大し、永続的に拡大されて不断に深化してゆく」（「序章」7号「革命戦争派の綱領問題」）これはかって塩見君自身の発言である。

㊀ 中央軍一元主義は赤軍派の組織路線の必然的帰結

ここまで述べてきたことから、すでに塩見君の誤り主義の誤りは明らかであるが、我々は71年6・17後の弔掲への回答になっていない、という側面のみを批判していったのです。

こうして結局、「連合赤軍」の結成は6・17後の飛躍に対応した主体の飛躍をかちとるどころか、唯軍至上主義的・軍事力学主義的傾向召還主義等の拡大を「固定化」してしまう転換点になったのです」（1972・12・27坂口弘死刑宣告簡）

すなわち連合赤軍結成は、「軍から党」という赤軍派のトブレ流の組織路線を更に一歩進めて、日共革命左派との統合司令部の建設を構想したものだった。我々は「赤報」1—3号で、連赤結成には①軍の統一という、党の統一という組織路線、②プロレタリア独裁を連合独裁とする考え方が含まれており、③赤軍派の側から言って、日共革命左派の側から言って、一種の解党行為であると批判しておいた。

だが、彼の場合、赤軍派のトブレ路線をレーニンの言葉で合理化するというかたちでの赤軍派に対するかかわり方を、おそらく彼の赤軍派への結果以降ずっとしていたのであり、連合赤軍結成以降の党内闘争の方法もそのようなものであった。つまり連合赤軍結成以降、八木君は袁向きは逆赤軍支持を表明しながら、八木君派の「レーニン主義」をだんだんと赤軍派にしのびこませていこうとするやり方をとった。これ明らかに組織目和主義であり、サークル主義による味方の強化」として統にはるせん滅戦争路線においたのは、第二次綱領論争における前段階蜂起の戦術の総括的不徹底、なしくずし的なゲリラ戦術の採択による彼の小蜂起至上主義の未完服の結果である。（「党死闘争の未完服の結果」の項参照）

注I。塩見君は「論争」1—2号において、第一次赤軍派結成以来赤軍派は「貧本主義批判」も持ってなかったかのように言っているが、我々がここまで論述ずで、主要に組織問題・戦術問題について述べてきたことからだけで、赤軍派結成以来の誤った貧本主義批判の存在は明らかである。すなわち、赤軍派結成以来の誤った貧本主義批判は、「藤本進治の『革命の哲学』のプロレタリアートの二重性の内的矛盾の自己展開の弁証法的構造を踏まえた上でこれを実践的主体から把握し直した（「赤軍NO2「赤軍派同志への私の自己批判」坂本均＝塩見孝也）とうたい、「過渡期世界観（自然史から真の人類史の道程としての時代に於ける人間の位相転換を通じた真に自然や社会に対する革命的人間の成立」（「赤軍」2号坂本＝塩見自己批判書）を獲得した党—軍は歴史的体現者であり、この「すでに類的存在を内包」（「赤軍」2号「反戦闘争の今日的意義と世界革命戦争」）した党—軍（統一戦線）の水統的発展、運動として共産主義運動があり、その結果として共産主義社会（赤軍派にとっては真の人類史の開始）の建設があるとされたとすれば、当然にも党—軍内部の「共産主義的人間関係」の形成としての「共産主義化」は最も中心的な赤軍派の綱領となり、組織規律を支える基準となったのである。「共産主義運動は党と軍の結合を起点として、軍と統一戦線（人民）の結合を媒介に機動戦と陣地戦を結合しつつ、生産関係、教育、文化、家族、男女関係と拡大し、永続的に拡大さ

注II。「共産主義化」については後にも述べるが、連赤以前赤軍結成以前においても、特に中央軍内部における個々人の「共産主義化」における誤りの一方的なとらえ方によって問題が立てられることによって、必然的に規律問題を軸として整風運動としての個々人の人格の確立が、一面的に強調される傾向はあったと思われる。中央軍の組織形態については「共産主義化」は個々の隊員の共同生活と関連して

イデオロギー的には、注I で述べた赤軍派の唯物史観の歴史哲学への解消が、人類解放闘争などとして革命戦争を超階級的に位置づける傾向を許容したこと。例えば「過渡期世界観（自然史から真の人類史の道程としての時代に於ける人間の位相転換を通じた真に自然や社会に対する革命的人間の成立」（「赤軍」2号坂本＝塩見自己批判書）を獲得した党—軍は組織的原理を「統合司令部」（「赤軍」1—3号）、「党の統一」という組織路線、②プロレタリア独裁を連合独裁とする考え方が含まれており、③赤軍派の側から言って、日共革命左派の側から言って、一種の解党行為であると批判しておいた。

だが、彼の場合、赤軍派のトブレ路線をレーニンの言葉で合理化するというかたちでの赤軍派に対するかかわり方を、おそらく彼の赤軍派への結果以降ずっとしていたのであり、連合赤軍結成以降の党内闘争の方法もそのようなものであった。つまり連合赤軍結成以降、八木君は袁向きは逆赤軍支持を表明しながら、八木君派の「レーニン主義」をだんだんと赤軍派にしのびこませていこうとするやり方をとった。これ明らかに組織目和主義であり、サークル主義による味方の強化」として統にはるせん滅戦争路線においたのは、第二次綱領論争における前段階蜂起の戦術の総括的不徹底、なしくずし的なゲリラ戦術の採択による彼の小蜂起至上主義の未完服の結果である。（「党死闘争の未完服の結果」の項参照）

日共革命左派が統によるせん滅戦を意志統一していった過程は、赤軍派とは異なるが、本質的には共通している。日共革命左派については別の機会に我々の意見を述べたい。）

だが、戦術において統によるせん滅戦を第一義的な遊撃戦の戦術と考えた場合、当然にも6・17爆弾闘争から統撃戦へと進むことは「建党建軍の内的矛盾」として把握されることになったわけであり、決定的な党的飛躍として把握されたわけで、実際、民間の質的発展は中央軍の組織改組を要求したことを基礎にして、森君は中央軍一元主義をとることとなり「軍の全面的な組織改組を行っていった。

「軍が地方でもっと政治の要求（1972・12・27坂口弘死刑宣告簡）とか、「地方での作戦の挫折、東京での組織の無り上げ政治の要求」などとも述べられていたように、「前衛の軍人化」「軍の中の党」の組織路線の限界は、米子における M作戦の失敗の後、中央軍内部においてもあらわれていったのであり、八木君を穂積君の民共主義、地方軍建設の主張が一定の力を持って登場してきたことにしても、森君はこれをレーニン教条主義として従来の赤軍派の「古い党」に対する批判の仕方を踏襲して、トブレ路線を最も純化することによって、全面的な組織改組を行っていったのである。

このような問題は非常にはっきりしている。森君が「武装蜂起による味方の強化」として統にはるせん滅戦争路線においたのは、第二次綱領論争における前段階和主義的なサークル主義

7・6事件以来の赤軍派の組織路線は、森君によって徹底的に批判され、純化されて突現された。中央軍一兵士義をとらなければ、八木君の民族主義、地方武装闘争主義が勝利していたか、それとも赤軍派の分解が進んでいたかどちらかである。塩見君は「AとBの論争の正しい解決」に対して、Pがどのようか一方の側に立つのではなく「（論説）2号9P）などといっているが、では塩見君は当時「前衛の軍人化」「軍の中の党」の組織路線を経済し、第一次赤軍派の二元的党組織を総括し、7・6事件を総括した上で何らかの組織態度を打ち出していたのか？赤軍派のどの人間も第三の組織態度を表明したものはなかった。なぜなら森君の中央軍一元主義と八木君の民兵主義・地方軍武装（上野君の三種の軍隊論も同様）との対立は、赤軍派結成以来のうちにスターリン主義党組織観の残シを残してきたところから発生しており、赤軍派結成以来、その対立の根本的解決をみなかった二つの組織観の対立だったからである。しかも、赤軍派は7・6事件以降「レーニン主義」とすることによって、革命的マルクス・レーニン主義を復権するとの自己閉ざしてしまっていた。少くとも赤軍派赤軍派であろうとした限りにおいては、どのような事情からしても森君が中央一軍元主義をとったことは必然である。問題は7・6事件を出生の秘密とした赤軍派の組織路線の根本的な総括にあるのであって、この総括を回避すれば、赤軍派の諸君は必ず革命戦争路線をも清算することになるのである。このことは塩見君の次のような党の「イメージ」によっても証明されている。

「（C）プロレタリア政治を喪失した結果としての下部追随的「前衛の軍人化」の組織路線とその裏返しとしての、やはりプロレタリア政治抜きの官僚的・スターリン主義的戦闘至上主義的な小ブル組織の克服、プロレタリアで構成されたプロレタリア政治に領導される政治と軍事、国際と自国の階級闘争の結合、プロレタリアと小ブル級民等抑圧層の前衛を中心とする統一を通じて、森君によって徹底的に純化されて突現された。中央軍一兵士義をとらなければ、八木君の民族主義、地方武装闘争主義が勝利していたか、それとも赤軍派の分解が進んでいたかどちらかである。塩見君は「AとBの論争の正しい解決」に対して、Pがどのようか一方の側に立つのではなく「赤軍派の過去の組織路線との関係で、第一次赤軍派の三月の党組織の改良版である、塩見君が戦術について「反帝反米のプロレタリア民主主義」を結集され統一戦線の形成と、党による指導」を統一戦線に基礎を置き、これとしっかり結びついた「武装闘争の戦術等」（2号9P）と言っているようにどちらもわかるように、塩見君は統一戦線運動＝民主主義運動（プロレタリア民主主義とはプロレタリア独裁以外の意味ではありえない。反帝反米のプロレタリア民主主義という塩見君の主張は、塩見君もまた赤軍派の他のメンバーと同様純粋民主主義が社会主義に転化すると考えていることを示している）を拡大するための制激剤として遊撃戦を考えており、統一戦線運動＝民主主義運動を指導する党組織に成属するものとして軍事委員会の指導下におかれる軍事組織を考えているのである。日共革命とは、塩見君の主張は、赤軍派の従来の路線の清算であり、完全な後退である。何よりも塩見君は自分が過去唱えた「前衛の軍人化」「軍の中の党」の路線にしろ森君の塩見君の主張は、赤軍派の従来の中央軍「一元主義」にしろ第一次赤軍派の中央人民組織委の系列に代表される、スターリン主義党組織の残シを例えばドブレ路線（すなわち従来の「百花党」では革命戦争を組織することができないというスターリン主義党組織観）に対する戦術的批判）によってではあれ克服しようとし、革命戦争路線をとることにおいて政治と軍事を統一しようとしたのであったのだ。だからこそ「共産主義化」という組織思想を生みだしたのだ。赤軍派のドブレ路線の破産は今日の階級情勢において労働者階級の共産主義的要求に立脚した革命戦争の戦術が要求されていること、労働階級の共産主義的要求に立脚した革命戦争を組織することのできる党建設が行われなければならないこと、この党建設は、革命的マルクス・レーニン主義の党組織の基本組織とするスターリン主義党組織観を根本的に克服することによって、進行しうることを教えているのであって、塩見君の如き、人民民主主義革命論の姿協と結合しし第一次赤軍派の党組織の改良路線は、結果的には遊撃戦術の消滅なのである。一応「非合法・非公然を前提にして」などと塩見君は述べているが、塩見君の述べる通りに組織建設をうならば統一戦線運動＝民主主義運動を指導する党組織は必ず公然化し、軍事委員会と軍事組織のみが非公然となり指導部が二重活動をやることになるのは眼に見えている。塩見君はマルクス・レーニン主義党組織の組織承発展ということが全然わかっていないことが致命的なのだが、これでは彼は、連合赤軍建設に至るまでの赤軍派の歩みを縮小再生産することもできない。結局彼は八木君達に代表される公然たる解党派＝革命戦争消滅派と手を共に上げを並べてしまっているのである。

〈八（注）森君は次のように言っている。

「6・17後の実践的ポイントは政策としての「組織戦」の提起ではなく、ぼくは当初からやはり半合の任務としてのみこれを考えている。」、軍の戦闘グループ、組織させて、自らの唯軍主義、唯純主義の組織＝戦術上の極左路線、左からの挑発と闘わせることだったと思います。こうしてみる70年時機主義を脱皮するのに必然だったぼくの唯軍主義＝党としての指導を展開できず、その能力を喪失した状況から正しい党的指導の確立（その意味での第一→党へ）飛躍できる第一歩を歩めたと思います」（1973・1・1板東国男発書簡）

この総括は塩見君と全く同じではないが、結果論であり、森君の「党主義」の消滅につながっている。唯軍主義・唯純主義としての「ドブレ路線は、森君によって「組織」が遂行されていたとしても克服できたとは我々は考えることができない。森君の「組織戦」という考え方は、それ自体ドブレ路線の枠内での手直しであって、「組織戦」を基本組織とするスターリン主義党組織観を根本的に克服することによって、進行しうることを教えているのであって、塩見君の如き、人民民主主義革命論の姿協と結合しし第一次赤軍派の党組織の改良路線は、結果的には遊撃戦術の消滅なのである。一応「非合法・非公然を前提にして」などと塩見君は述べているが、塩見君の述べる通りに組織建設をうならば統一戦線運動＝民主主義運動を指導する党組織は必ず公然化し、軍事委員会と軍事組織のみが非公然となり指導部が二重活動をやることになるのは眼に見えている。塩見君はマルクス・レーニン主義党組織の組織承発展ということが全然わかっていないことが致命的なのだが、これでは彼は、連合赤軍建設に至るまでの赤軍派の歩みを縮小再生産することもできない。結局彼は八木君達に代表される公然たる解党派＝革命戦争消滅派と手を共に上げを並べてしまっているのである。

〈八（注）森君は次のように言っている。

「6・17後の実践的ポイントは政策としての「組織戦」の提起ではなく、ぼくは当初からやはり半合の任務としてのみこれを考えている。」、軍の戦闘グループ、組織させて、自らの唯軍主義、唯純主義の組織＝戦術上の極左路線、左からの挑発と闘わせることだったと思います。こうしてみる70年時機主義を脱皮するのに必然だったぼくの唯軍主義＝党としての指導を展開できず、その能力を喪失した状況から正しい党的指導の確立（その意味での第一→党へ）飛躍できる第一歩を歩めたと思います」（1973・1・1板東国男発書簡）

この総括は塩見君と全く同じではないが、結果論であり、森君の「党主義」の消滅につながっている。唯軍主義・唯純主義としての

㊂まとめ

当初、更に7・6事件の組織総括を行い、塩見君の資本主義批判の批判について述べる予定だったが、「前衛の軍人化」「軍の中の党」について述べただけで、すでに予定の紙数に達してしまった。森君が中央軍一元主義の路線を選択に至るまでの赤軍派の歩みを縮小再生産することもできない。結局彼は八木君達に代表される公然たる解党派＝革命戦争消滅派と手共に上げを並べてしまっているのである。

〈八（注）森君は次のように言っている。

「6・17後の実践的ポイントは政策としての「組織戦」の提起ではなく、ぼくは当初からやはり半合の任務としてのみこれを考えている。」、軍の戦闘グループ、組織させて、自らの唯軍主義、唯純主義の組織＝戦術上の極左路線、左からの挑発と闘わせることだったと思います。こうしてみる70年時機主義を脱皮するのに必然だったぼくの唯軍主義＝党としての指導を展開できず、その能力を喪失した状況から正しい党的指導の確立（その意味での第一→党へ）飛躍できる第一歩を歩めたと思います」（1973・1・1板東国男発書簡）

この総括は塩見君と全く同じではないが、結果論であり、森君の「党主義」の消滅につながっている。唯軍主義・唯純主義としての

（2号10P）

彼によれば廟堂は連赤指導部が自己の人生観を絶対化した結果であり、「小ブル的な自己権力形成的側面」が生み出したとされている。連赤指導部をブルジョアジーに売り渡すものである。

共産主義革命の原則と党の組織規律との関係についてもあいまいにしている。「共産主義化」とは極端な民主主義としての水平主義、あるいは平等主義を二方の基礎に持ちながら、軍事組織にこの必然的に要求される中央集権主義の萌芽を含んでいるものであり、この組織観を「自立」として答えているようなものであり、この組織観思想を、「党」軍内共産主義」として美化するものである。つまり、「共産主義化」は共産主義革命に関する原則上の誤りを犯していると同時に（この点はすでに（ロ）「前衛の軍人化」「軍の中の党」について述べた）、その誤りが組織思想における誤りとつながっているところに特徴があるのである。だからこの誤りは、革命党の大目的が労働者階級の経済的解放であることを明らかにし、プロレタリア階級独裁権力の性格と任務を明らかにし、中央集権主義の組織思想を党建設において具体化することによって克服できるのである。塩見君のように単に問題を小ブル革命主義の誤りとして抽象化することは、必ず合法マルクス主義に対する屈服（彼の場合は講座派経済学とドイツ流の分析史観の様式）につながり、資本主義批判を形而上学的にとりあつかうことになるのである。彼の「共産主義化」総括の反動性は次の箇所で明白である。

「資本主義の個人的な科学的産もまた振る舞る明らかになった。その破産」（ロマン的な）批判しか持ち得ず自己の人生観を自己流に共産主義に似せてしまう小ブル革命主義負の側面は、真の思想闘争＝整風無総括、無継承、無組織はすでに明らかである。我々としては、この批判はそっくりそのまま塩見君に返したい。

69年夏に書かれた次の文章を引用して結論に代える。

「そして、赤軍派は、過渡期世界論に立脚した世界革命戦争をめざした軍事を組織する党であるが故に、レーニン党との区別が云々されて、その結果、レーニン党の基準でしばるとはスターリン主義だという主張が生れる。だが、落ちつい主張が生れる。だが、落ちつい主張が生れる。だが、落ちつい考えてみよう。たとえ百歩譲ずってわが同盟の基準と規約がレーニン党の丸ゥつしであったとしても、それは、わが同盟の同志たちが、大会において確認した基準と規約である。だから、その基準は、わが同盟の組織をこうそくするわけであり、レーニン党の基準がわれわれをこうそくするわけではないのである。しかも我同盟は、革命的マルクス主義の旗を高く掲げ、過渡期世界の革命を世界革命一国同盟革命として指定し、階級形成論においては、ソヴィエト運動論を提起しつつ、第一に成員の厳選の原則に対して、中央集権主義にもとずいた党の運営が問われたことを強調した。そしてそこで、中央集権主義にもとずいた党のことによって、レーニン党からの影響を遮断している。そしてそこで、レーニン党からの影響を遮断している。そしてそこで、中央集権主義にもとずいた党の運営が問われたことを強調した。そして「統一共産主義化」論にもとずいた整風＝整党としてしか答えられなかったことである。（傍点省の表現を借りれば「絶対主義的プロ独運動」の展開）。塩見君は骨の髄まで個人主義的組織観に染まっており、連赤指導部がどのように中央集権主義の組織思想の具体化を迫られ、どのような意味で、その指導の破産を結果したか、理解できて初めて連赤指導部をブルジョア民主主義的観点から批判しているにすぎないのである。

そもそも、「塩見孝也論争」の総括は、「塩見君は我々共産主義者の上に立ち、自己の誤りを認めず、自己の誤りを他人に押しつけ、自己の誤りを他人に押しつけ、自己の誤りを他人に押しつけ